

特別
18
757





閏四月十七日

內外新聞



第一

第七日
每出板

知新館

神戸新聞 西四月廿八日 我四月廿八日

○ 第五月十八日 我六月廿八日 夜中ノ大雨ニヨリテ

當地ニ出来セシ堀切ノ不行届ヲ證ス可シ

辺頃美麗ニ造營シタル米國コンシユル名

館ノ前面ニアル砂濱ハ斯ノ大雨ノ水害ヲ

醸セリカモ曩カモニ工カモ人カモ堀切カモコカモ營カモシカモ時カモ勞カモ煩カモヲカモテカモキ

シトルカモ名カモ社カモ中カモノ居館ハ尤モ此水害ヲ受夕

リ軒下并ニ商店ヘノ通行カモホ暴流ノ為ニ大

ニ害セラレタリ是日本人ノ建築ノ術ニ疎

キカ故也

○大坂ヨリノ報告ニ云

大日本 皇帝ハ未タ大坂ニ滞在ナリ供奉ノ
面々モ多人數輻湊シテ大体市中ニ充滿ス
ルカ故ニ如何ナル小家ト雖借料等非常ニ
貴騰セリ茲ニ於テ考フレハ大坂ニ開港セ
ント欲スル人ハ斯ノ如キ借賃ホノ高價ヨ
シテ畢竟盛ニ行レシ商法モ漸々衰微ニ
傾クノ不幸ニ遇セン

○第五月十七日

我四月朝

サラミス

名船ト云フ

蒸氣船ハ船ニ英國公使ハルリーバックス

名ノ旗章ヲ揚ケテ入港セリ時ニフセーン

名船ヨリ定例ノ祝砲ヲ發セリ斯テ暫時ノ後

サラミス船ハ大坂ニ出帆シ再ヒ翌日夕ニ

至テ歸着セリ

○同日夕ロト子

名船副將ケツヘル

名ノ旗章

ヲ揚テ入港セリ時ニ米國戰艦コルヘツト

オナイ夕名船ヨリ祝砲ヲ發セリ

○翌十八日我四月廿六日朝ゼブラ船ハ英國公使ハ

ルリーパークス名ノ護衛トシテ兵士率數

名ト海軍士卒ヲ乗セテ大坂へ發セリ

○同日ロツト子一オセーノ二艦モ亦大坂

へ赴ケリ時ニ天保山ノ砲臺并ニ米利堅艦

コルへツトヨリ祝砲ヲ發セリ

○同日夕へルン名船二百五十人ノ婦人小兒

ヲ乗セテ江戸ヨリ來着シ報告ヲ陸ニ通ル

ヤ直チニ豊後洋ニ向テ發セリ此報告ニ依

テ左ノ新聞ヲ得タリ

○會津并其外等凡テ廿万五千ノ兵ヲ率テ江

戸へ向テ發セリ一橋徳川氏也ノ海軍モ亦海軍

奉行某等七隻ノ軍艦ニ將トシテ會津兵ノ

應援ヲセンカ為メ昼夜蒸氣ヲ燃シテ江戸

海ニ在リ當時江戸城ハ已ニ

皇帝ノ所領ニ属セリ且ツ碇泊スル船ハ江戸

在ル女人童子ヲ他所へ運漕スルノ用意ヲ

ナセリ

論者曰是余ク空シキ風説ニシテ信スルニ足ラス
暫ク千五百人ノ兵アリト聞クニ今二十万五千
人ノ兵有リトハ虚説ノ甚シキ者歟

○十八日朝我四月廿六日横濱へ發セント用意セシ

バルクオレークス名船ハ延期シ翌日我廿七日出
帆セシ時未タ港口ヲ出サルニ不幸ニシテ
洲ニ乘セタリ時ニ在港ノオセーン船ヨリ
速ニ挽舟ヲ出シタレ凡東風殊ニ甚シクシ

テ挽クフ能ハス又ストーニチ船ヨリモ挽
舟出シタレ凡亦能ハス後漸クアリミチシテ満汐ノ
時ニ當リテコツクチマヘルト云小軍艦ヲ
以テ挽出タセリオレークス船ハ聊モ損害
ナクシテ横濱へ出帆セリ

○香港オランダニ在ル英國コンシユル名後メトホル
スト名人ハ上海ノコンシユル医官ウインチ
エストル名人ノ後役ニ任セラレ又メトホル
ストノ後役ハジョーンマルクハム名へ命セ

ラレシヲ聞ケリ

○本月十六日我四月廿四日ノ後ハ物價相場ノ報告

ヲ得ス然レ正木綿糸并ニサハイ服連ハ他
日價ノ上騰子不スルヲ待居ルトテ殊ニサワイ
ハ甚タ下直ニシテ買込タル人困却ノ風聞
アリ

○津出シ品物ノ中茶ハ殊ノ外好ミ手多シ然
シ仕来リシ出港物ハ多生糸煙草ナリトツ
或人ノ書狀

来意ノ趣ニ夏中小艇競駈コフ子セリカケノ企コレ有ト實

ニ開鬻ノ一トモ相ナリ或ハ適然タラン然
リト雖社中人少加之小艇モ亦些少ニ属ス
或ハ不可ナランカ余以為ク時々砲發ノ會
ヲ催シテ此ニ換ヘハ如何ン費用モ甚少ク
シテ木の糊紙等モ又聊備ハレリ且ツ地形
ヲ撰ミ東方ノ海濱ヲ以テ之ニ充ツ可シ發
砲期日ノ如キ毎十四日ニ一度ツ、ニテ可
ナラン又費用ヲ減資スルカ為ニ一箇ノ粗

的ヲ用ヒシ此拳ハ實ニ社中而已ナラス恐
クハ看官モ亦愉快ヲ極ルニ至ラン

近日入港出港船日記

入港ノ分

○第五月十七日サラミス横濱ヨリ着 同日

ロデ子一全所ヨリ十八日ヘルマン江戶ヨ
リ

出港ノ分

○第五月十七日ウヰット上海へ出帆 十八

日ヘルマン備後洋へ今日オライクス横濱

同日ウヰルケン長崎へ

兵庫大坂ノ通船

○ストンチ船名ナル蒸氣船日々朝八字ニ我五時
神戸ヨリ大坂へ出帆シ午後五字ニ我七時
大坂ヨリ亦神戸ニ發ス荷物旅人等運輸ス
可シ

以上

支那國

此歲ノ初メ二月頃ロヨリ唐國北京地名ト云
フ如ニ叛逆人アリレトソ其ユヘンヲ尋
ヌルニ尤キリシタン宗門ノ徒起ツテ
王命ヲ用イツ妄リニ逆意ヲ企ツルカ
故ニ天子ヨリ或ル大将ニ命シテ之レヲ
伐タシムトイヘ氏徒黨ノ外ニ外国人四
五人モ交リ助クルト云フ然ルニレイノト
云フ大将イデ、ヨリ克ク之レヲ平ラ

ゲシカドモ残兵別レテ帝ヘノ糧道ヲ絶チ
專ラ海賊ヲナス地名故業京地名之レカタメ
ニ大イニ擾騷スト云フ

集者曰ク舊幕府政權ヲ採ル之
時ニ當ツテ肥前ノ国島原ノ村落
或ルハ長崎ヨリニ里斗リ離レレ
ルロニ浦上ト名附クル村アリ凡
ニ三千家モ有リト云フ如ナトハキ
リシタン宗門ニ組セシモノ凡ッ合

セテ二千入モ有リレト聞ク夫レニヨツ
テ去年五月コロ尽ク召捕リニナリシ
カドモ如何ナル故カ之レヲ釋ルシ
今ニマダ盛ンナリト我カ宗門ニ皈依ス
ル者ハ皆之レヲ救フノ理ナル故佛人ヨ
リ助ケラ乞イト云フ然ルニ当節ニ至
リ何ニカ御所置ノタメニ殊ニ御役人
方ノ御配慮トソ實ニ此ノ宗門斗リ
ハ恐ルコナリ

兵庫新聞

慶應四年歲壬四月三日松州兵庫

補公廟前高札之寫

大政更始之折柄表忠之成曲、彼為 行天
下之忠臣孝子を 勅獎被 授、有らるる補賜
正之位中將正成精忠節義其功烈萬世輝
真二千歳一人臣子之龜鑑、故に今般
神号茲退謚、社増造、崇祀、極度、異念、以依
之、金千兩、御寄附、此、在、事、

他正行以下一族之者等鞠躬尽力其切方
不少暇也賞也 擬合 紀可有之旨也
仰告事

右之通也 仰告能也 天下有志之者所傳
所著也 其意同志類之向也 可也 其也之

辰在四月 兵庫 裁別所

評者曰

上心以古へ志は孝子ヲ愛物得る事は其也

一也 其也 昔之人之志也 近
也 故蓋五倫之道也 其也 志
相一也 志也 志也 志也 志也

○五穀大旱十キ子ノ能ハス人間病之也 能ハカ力
故今度所一新之 折病未夕天下平定トモ云レサ
ル中ニモ只借民ヲ助ケニトモ第一ニ思フコトヨ
リ之ヲ以て折病ニナレテ之病院所ニ至
テ後^{アノ}適ク萬民ノ病ヲ平癒カセト各医コ集メ
王ヲ定之 能者子トモナリ去ニヨツテ如折十九

早賊者ニモ病来ト有レハ速ニ治テ之療治ヲ願フ
ト云フ事ナリ

此病院所ニ立方ニ於テ莫考シ所入用十九日天
下有急シ人ニハ所寄附以是紳トお集ルル其
節トハ老丈ケ出セトノ所ニ由テ以辰七日月
二冊出朱ノ節ト其書誌ナシ

關東新聞

以辰辰東海平定イタセテ故鎮撫惣督トシテ
近レテ將大帥言撤沛出逢ニ相来ト云テ

戦争の便

四月十九日戦兵共町少宇都宮ニ據ルニ是日戦兵
防クイアタワス其夜已ニ為城セリコノ事下口朝
友軍へ告来リテ故ニ直ニ官軍ヲ擧出ニニ来リ
小山ト申驛ニオイトテ我ト催ス所城放少ニテ
宇都宮城ニ引退キ其古ニ日宇都宮義兵友軍
大擧利アリテ者有戦兵城中ニ地雷火ヲ伏セテ
迹ニ其夜官軍ヨリ城ヲ取返シ人城ニ起テ増傷
火散シテ其後官兵一妻ノ夫ケルニ怪事ナリ

有之由是言也然我兵日老山之屯ストイヘ此コニモ止軍
スレテ可クスレテ終ニ會戦ハ遂ニ難ル

一信然路ハ進ミシ我兵我後高田道ニテ松代へ進ム
トヨ上田相率ヨリ加勢トシテ幸人宛持出ス相代ヨリ
相率ハ道路ニ遠カニ難ル、トニテ火急ニ人救ヲ
探知ス、ト多クハ六ケ敷キ管ナルニ今幸人ノ兵出サレシ
ト丸毛有ルヘシト礼謝シテ亦加勢ニ及バズ去リ以テ
返ス次ニ上田ハ迫國ノ、トナカラ僅カニ五十人ノ兵ヲ出ス
ト古クハ只去伏ノ加勢ニシテタノムニ足ラス織ト共

ニ討スルベシト令ヲ下スカ高田勢驚怖平伏シテ
本國へ使者ヲ馳シ重テ二百幸人ノ援兵ヲ加
ヘテ以テ我ヲ救フニ挫シキ織途方ヲ矢セ敗走
スル処ヲ及ヨリ高田勢進討シテ殊ニ勝利アリ
リシトヨ依之コレヲモ留ナ會城へ逃リ勢難ナリ
許ニ曰ク高田勢先ニオヘモセス我カ城下ヲ
甚修ニ通シ今織ノ進ルニ及シテ其意進討シ
事甚意怪ク士道ニ挫ラツトノ風吹
依之信越及ヒ是東ハ平穩ノ由風吹ナリト及

い幾年ノ中 龍平ノ物ト云ヘキ者ハ松代勇ト云下
ナリ上田勇一ノ云々杯ニテハ突ニ強國ト云ヘシ

元新選組

近藤勇事

大和

若ハ先月野洲ニヨイテ召捕ラレシ如能ク所詮
ト来リ日ハニヨイテたノ如ク亦置キ其トト

近藤勇事

大和

若者又究悪之罪有之如甲州務沼武州流山
ニヨイテ友軍ニ敵對々条大逆有之今之同条
事の之

至四月日

若く前級三條川原におありし深者之

西園寺三右衛門中將云之丹能撫所總督ノ清供
志々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

大江山はさる白雲と云ふ事あり

あつて法強れりあつて

園田忠平

甲州諸領より織の強弱を
見る

無子孫也中是也

老ぬ故のす

良寛

伏水より織をよす挿ひし時

五箇川之様

平藤

と信思ふ

長肥

夜三月

於波府總裁有栖川宮様へ英國公使相福

比呂科及之付る公使参殿途中より

と毎程致す有と相忍由所觸達有之

度二月五漢より建言

僅る事より及南城所陣定り御廟集

り此所在公義より有る海兵給り更引て

相束りる公自死し況来りお強公度より之

及三月甲之陣進軍と裁會有る公折柄

知新録告文

け及我輩も社伴と結い日本^{ヤマト}再國此
 海^{ウミ}復ハ^タ又^タな^リう^レす^レ海^ノを^ミき^テ一^ノ中^ノハ^ハ御^ノ氏
 有^ルと^モ免^レ世^ノの人^ノく^レ一^ノ者^ラを^んた^ル免^ナる^ル
 一^ノ海^ノの^ミ一^ノ中^ノハ^ハ御^ノ氏^ノの^ミや^ウ知^ル被^レせ^ルも^ト
 け^レの^チら^ウ一^ノハ^ハひ^ラら^ウ家^ノと^モも^ト一^ノ海^ノと^モ
 一^ノも^ト一^ノみ^をを^んる^ルと^モ社^ノ伴^ノ一^ノ口^ノの^ミ前^ノ
 志^トと^モあ^ん云^々

十七日朝神戸^ニテ^一班^ノ事^ヲ出^ル来^セリ^ト神^ノ戸^ノ任^ノ居^ル
 木挽^ノ与^テ吉^ト中^ノ者^ノ兼^テ人^ト大^ニユ^ラフ^レ人^ノ名^トト^リ者^ノ居^ル
 斧^ヲ以^テ切^リ付^ケシ^テ一^ノハ^ハ空^ニ以^テ来^ル木^ノ挽^ノイ^ハ力^ニ
 ホ^ド二^ノ働^クト^モ終^ニ金^子ヲ^ハ渡^サガ^ルガ^ハ故^ニ或^ハ
 急^リシ^テ者^ト見^ユ終^ニ金^子ヲ^ハ渡^サガ^ルガ^ハ故^ニ或^ハ
 ヒ^シニ^テ余^ノ程^ノ御^キシ^ト力^ニ云^フ折^リシ^テ十^七日^ノ輕^ク
 右^ノ木^ノ挽^ノ兼^テ人^ト方^ノ行^キケ^ルユ^ラフ^レ十^七日^ノ輕^ク
 シ^ケル^レ左^ノ空^ニテ^ハ立^チ直^ニ斧^ヲ持^テ系^シテ^ハ獨^ラ
 へ^シテ^ハ迷^ル主^ノテ^ハ頭^上へ^シテ^ハ迷^ル主^ノテ^ハ頭^上へ^シテ^ハ迷^ル
 ノ^レ為^シ辨^ル然^ルニ^テ木^ノ挽^ノ坐^ヨリ^テ出^スト^モ云^フ
 今^ニ探^索ノ^レ内^ノ人^ハ平^生兇^悪無^道ニ^シテ
 評^日元^来武^勇人^ハ平^生兇^悪無^道ニ^シテ
 本^國ノ^レ人^トス^ル愚^ム處^ノ人^ト云^フ日^本心
 ノ^レ氣^質ニ^テ堪^ル者^乎
 二^ノ至^リシ^者乎^ル



閏四月廿四日

內外新聞

第二

第七日目每二出板知新館

神戸新聞

第五月廿三日
我壬月朔日

英國ス子ラー名船ノ著シテ支那國ニ在ル友

人ヨリ左ノ事件ヲ告來レリ今日ハ英國女

王ノ誕生タシ日ナルニ悲カサシムヘキ新聞ヲ得タリ

上海名地ニアルオーストリヤ名地ノ殖民シヨクドモ

彼國ノ太子ノ殺害セラレシヲ聞ケリ此太

子曾カッテ国民ノ移往ヘミヲ見物ノ爲メ恐怖シナ

ガラ上海江來リシ人ナリトソ又アイルラ

ンド名地ノ惡黨共至當ノ刑ヲ受ケシヨシ

今日ドーカラスニテ次ノ新聞ヲ得タリ
デンボルクニ在ル英國ノ太子ヲセド子
地ノ近辺ナルコロントナルフト云フ所ニテ
名
殺害セントノ企アリシト

又政府ノ傳信機ニテ次ノ新寫ヲ得タリ尚
委シキ事ハ今晚ニ至テ知ラルベシ右ニ記
セシ英太子。コロントナルフト消遙セシ折一
人ノ乞食鳥銃ヲ以テ太子ヲ發射セシニ此
玉背^{ヤナ}ニ中リ^{ズキホ子}脇骨ヲ^ヘ經テ終ニ^{イダツク}胃臟ノ外ニ落

着ケリ未夕此玉ヲ脱ク事能ハス患者甚夕
痛ミヲ覺フ然カシ^ダ医官ハ未死生ヲ弁セズ
ト

夕七時半ノ報告ノ趣ニテハ英太子ノ痛ミ
未夕甚夕シトイヘドモ漸治療ノ効アリシ
ト再ヒ第五月十二日^{我四月十八日}附ノ報文ニテ
次ノ事件ヲ聞得タリ英太子ノ腹中ニアリ
シ銃玉格別ノ痛ミナクシテ脱出シ得タリ
後子漸快氣シテ再ヒ公務ヲ司^ルニ至レリト

佛軍艦ドブリークス名船將ヨリ告文

先日船將ボルロツク名淺深ヲ測量セシ後

モ大坂川口ノ流勢漸相變シ且堰ニ於テ居

留地ヲ撰ム儀ニ付而ハ彼是議論不穩次第

モ有之依之先達而堰ノ港内ヲ側リシ通り

天保山ヨリ川口之船路ヲ能吟味シ此ヲ大

坂兵庫在留ノ人々江心得サセ候ハガ可然

ト存候在留ノ人々此儀ヲ希望スルニ至ラ

シノンカ爲メ此一通ヲ大坂兵庫ノ役所ニ

指置ント存候此談事ニ就而ハタトヘ仮令一句ノ

余モ無難ニシテ經過スト雖忽チ又危難ヲ

生スルニ至ルヘキヲ人々江說得スヘキ事

過日軍鑑トブリークス名船數日天保山ニ碇

泊セシニ數多ノ日本船ノ此辺ニテ難ニ逢

シヲ見タリ其時人民ノ溺ネレシヲ知レリ

今日正九ツ時アメリカ米田軍鑑オナイダ名船中帆柱

ニゼオルジ名人ノ旗ヲ揚テ凡四分時ノアイ

ダ大砲廿一發シテ英國女王ノ誕生日ヲ祝セ

リ英ノコンシユル館ハ勿論米國コンシユ
ル館其餘居留地方ニ且港中碇泊ノ船ホモ
尽ク祝旗ヲ揚タリ英國ノ政ヲ執ル人々ハ
今日女王誕生日ニ就テ益國威ヲ輝シコト
ヲ欲ルナルベシ

今朝英國軍艦セルペント名船著シ第三月十
三日附ノ本國ヨリノ書翰且本月廿一日附
ノ横濱ヨリノ書翰ヲ持來レリ

横濱ヨリノ新寫ハ江戸ニ於テ強勢ナル會

津取沙汰ノ外他事ナシトソ

先日或人ヨリ書面ヲ以テ小舟競乘ノ儀ヲ

企シト雖ライフルヒリ競發ノ儀ヲ一紡同意セ

リ當地ノ總カナラサルニ就而ハ我々一同

常ニ砲器ヲ所持スルヲ管要ト存ス佐其術

ヲ知ラサレハ忽不用ニ附スベシ其修業方

ニ就而ハ夕刻暇ノ時ヲ得テ議シミナバ暫シ

ニシテ得ラルベシ然ル上ハ大ナル快樂ノ

一器トモナルベシ

當地水害甚シクシテ大雨ノ爲ニ墓地近傍
ノ砂土ヲ流シ込力故ニ政府ニ於テ木石ノ
類ヲ以テ段ヲ築キ居留地東方ニ有川ヲ堰
セントノ企アル由ヲ或人ヨリ聞ケリ此儀
ハ甚タ大切ノ事ニシテ速ニ是ヲ取行ンコ
トヲ願フ所ナリ若シ猶豫シテ雨降りノ時
ニ至ラハ暴雨ノ爲ニ墓地ヲアバカレ近頃
葬リシ死体ヲ衆人ニ濕スニ至ランカト甚
夕心痛セリ

昨廿二日夕五時半頃ヨリ^{ケキリ}瀝氣球ヲ揚ケ夕
リ當地ノ人々甚夕是ヲ驚キ感セリ然ルニ
惜イカナ夜迄持チ堪ヘザリシヲ

入港物

此頃次第減セリ來ル九十月頃迄ハ格別盛
ニ成ル間シク毛織物類^{ケアリ}縮緬類^{ナリ}ホヲ好人大
ニ減セリト云ベシ併シ可ナリニ賣レル物
ハ黒サワイ。毛織ヘンシイ。トルコ赤木綿并
木綿糸ナリ此木綿糸ハ好ム人モ有リ又價

毛上レリ鼠色木綿ハ此頃日本人ノ向ニハ
悪シケレトモ外國人ハ米因飛脚船コスタ
リカノ風耳ニテ三ドル余ノ價ニテ買入シ

出港物相庭

生糸 百斤ニ付價

- 奥州中品 四百三十兩ヨリ四百四十兩迄
- 同上品 五百兩ヨリ五百廿兩迄
- 飯田上品 六百兩ヨリ六百十兩迄
- 越前 五百兩ヨリ五百廿兩迄

第五月廿三日 我壬月朔日 迄ニ出港セシ高凡

二百箇斗

茶

横濱ニテ買込タル共上中下三等併セ凡四
万斤斗次第時候切迫セシ故外國人古茶ヲ
困マントスルノ趣アリ

新茶ハ先ツ第六月中旬トノ見込也

百斤ニ付價

並茶 拾兩ヨリ拾兩ニ步迄

中茶 拾七兩ヨリ拾七兩二步迄
上茶 卅二兩ヨリ卅三两迄
右下茶ハ當時大二直子サカ下リセリ新茶ノ極下
茶ハ當時賣物ニ有ト雖價高ケレハ未買入
人ナシ

生蠟

百斤ニ付十二兩一步ヨリ十二兩三步迄ノ
價ニテ凡二万斤斗買込夕リ當時未夕買入
サル僅ノ生蠟アリ

冥東よる此子孫 先月廿四日

此廿三日賊徒押領オウリヨウノ宇都宮城攻撃コウゲキのた免壬
生城より朝六ツ時六番隊并大砲三挺白砲
短カキ指添發軍引續き大垣藩一中隊大砲一挺兩
フトイ筒藩都合二百人にて進軍致以所四ツ時分宇
都宮城邊はて押浩ヨシツる迄交賊兵防禦セキ之手尚
在し城下町江陸臺場築立大砲一門并小銃
隊にて防戦致以得共間亦之攻落し城際キワま

て押寄せ八ツ時頃内外に砲戦嚴之を盾死
人別紙に通りには空に宛て敵方に之千五
百人余も有之不容易損折に是迄迄に
至り城兵裏道より操出し最初棄落せし基
場江乗入り壬生より返り路を絶別して
苦戦一同相働以右に通り城兵後を振り切
り以二付分隊位宛差出し戦争いし以は
弾薬兵糧^{カマクサリヒヨウ}少にお成り且運送く路を絶
陳てこにお満ち故一端繰引いたし兩藩共

引揚げ所口を基場城兵相固免居を散々
お破りお偽居に折柄五番小隊長長州一中
隊大垣も同断にて本街道より急陳即刻仕
寄せ發砲お始む然所因州藩一中隊にて壬
生城より急援として急陳返路相開き夫よ
り一度押詰免終に七ツ半時分落城大勝利
にお成城徒歩取百人余を盾二百人余とお
見へ以得共未取り調出来並に付逐々申越
以趣にて被以右につきお残我死人数を

發^{パツ}ホも是城以御國許江を指出以儀何分以
永計居下交充我死之墓所之義之当城下に
報恩寺之中寺へ取りきたる免置以右形行申
上以以上

五番隊

戦死 上田友輔

手負 美代藤之丞

川崎兵十郎

大廻新八郎

河野伊兵衛

六番隊

戦死

川北六左衛門

戦死

岩城平右衛門

永山寛太郎

西田要之丞

加納次左衛門

伊地知助五郎

築地宗二郎

岩切彦二郎

松井左兵衛

佐藤茂五郎

鶴木吉二郎

同隊手負

野澤七次

抗示龍右衛門

上原八郎

菱刈七之助

有川陽之助

松元清右衛門

横山勇藏

安田仲右衛門

縁先喜之助

伊藤正二郎

平成彦右衛門

宇岩彦之丞

山下喜之助

日高郷右衛門

伊集院小藤二

矢野八二郎

同隊深手

廻深五左衛門

川上彦八郎

鎌田喜之助

且輕隊カレ

戰死 井上伊右衛門

戰死 内藤金二

手負 宇都宮岩太郎

本營手負

鳥津式部

有馬藤太

種子田左門

外僕一人

右町 宇都宮報知如此以

四月廿八日関東より手紙之写

前略江戸夫ハ賊徒鎮撫ニ相成候得共官軍
著前ニ逃去リ候徳會之賊徒并ニ新撰組ト
唱ヘ候浪士江戸ヲ脱走シテ野州宇都宮并
ニ結城壬生近國所々ヲ押領致居クニ付宇
都宮應援トシテ茂根藩差越候処初メ流山
ト申所ニ浪士都合二百人余伏勢有之候ニ
依テ及戦候所賊徒近藤勇致降伏噐械ホモ
取揚ケ勝ニ乘テ宇都宮マテ押寄セ居候処
賊徒ヨリ狭歩ニ出逢ヒ大ニ敗走致味方死
人數多有之候然ル所因州土州應援トシテ
向イ候所壬生ニテ賊ト相戦イシニ是モ同
ク狭歩ニ逢ヒ敗走ニテ彈藥ホモ賊手ニ取
ラレ死人モ數多御座候時ニ長州藩一小隊
大垣藩二十人余薩州五番小隊共一ツト成
應援トシテ出陣ス去ル廿日野州ノ内岩井
村ト申処ニテ賊兵七百人余ト出合相戦候
処官軍ホ勝步取首三十余級大砲三挺小銃
數多騎馬三疋右分取ニ流産以然ル処去ル

廿三日岩井村之殘徒五百人余千住ト申宿^{シユク}
マテ押寄セ^レ以ニ付佐戸原一小隊薩州一小
隊早速繰^ク出シ以所降^{ゴウ}伏之ノ心ニテ敵セザ
ルガ故ニ應接ニ及以処弥降伏イタシ候ニ
付所持ノ大小砲數多騎馬三足鎗四十本斗
り取上々右ノ内二百人余ハ佐戸原預リニ
相成外三百人余ハ備前藩冥係ニ相成申以
薩藩六番一小隊大垣藩一小隊又々宇都宮
江押寄ル

右戦ノ次第入江以來ヨリ今日迄ノ所置荒
々淨類知如此御座以以上

月日

中村某

右月人ヨリ或友人ノ方江贈リシ書状ノ
写ナリ近頃妄^{ホウ}説^{セツ}流行ニ付此實正ノ手紙
ヲ以テ衆人ノ疑惑^{ナク}ヲ情^ガサシ爲^ノナリ他
日諸君實正ノ事ヲ得玉ハダ速力ニ知新
館^ニテ御^シ報^セ知^ルヲ希^フ直^チニ彫^シ刻^シテ萬民
安堵ノ一助トセン

先ニ彦根軍門江降伏セシ板倉父子ヲ下總
結城ノ城中ニ於テ斬首セシトノ風評也
過日秋田候ヨリ羽州庄内江使者ヲ指向テ
討會ノ論ヲ立テシニ庄内ニ於ハ會ヲ討ツ
ヘキユヘンナシト答フ依テ當時秋田候ニ
千三百人余ノ兵ヲ以テ庄内入口島海山ト
云処迄押詰ノラレシ夫レニヨツテ羽州龜
田岩城左京太夫殿日本庄六郷兵庫頭殿共
其勢合セテ三千人斗出張ストノ風評

大坂ノ新聞

○本月十七日薩島鳳瑞丸ト云フ軍船ニテ大
監察使トシテ三條大納言殿副トシテ萬里
小路辨殿東下セラレシ陪從ニハ西郷吉之
助林玖十郎小笠原唯ハ江藤新平等十リ守
衛トシテ阿州之兵二百人斗御供十リト云
○曰幕府ヨリ亞国江注文ニナリシ鉄船ハ已
ニ先頃横濱ニ着シタルヨシ今度三條殿御
下向ノ上右船御取入レニ成筈ノヨシ

○大坂鎮臺醍醐大納言殿兵庫江御下向アリ
シ乃千岩下佐次右衛門陪從セント云フ

○今度大坂運上処ニテ大坂ト横濱トノ間ヲ

通行スル飛脚船浪花丸ヲ取立ラレタリ乘

組人ハ多分英人之由尤取締トシテ薩藩肥

後七左工門ト云人衆組ヲ命ゼラレ來廿五

六日ニハ兵糧米千石余モ積デ江戸江下ル

由便船トシテ外國事務判事大隈八太郎并

海軍先鋒叅謀島團右工門トカ云人モ東下

スト云フナリ

右ノ飛脚船へ便船ヲ願フカ又ハ荷物ノ

運送ヲ願フ人有ラバ川口運上所カ或ハ

内平野町松屋町江戸屋平右工門津屋重右工門

者江申出セトノ事ナリ

告文

由良彌太二

私儀大坂御運上所ノ傍ラニテ借馬屋ヲ始

以ニ付各々様御用被仰下度尤馬具儀ハ和

洋共相備居候間御好ニ應シ可申且馬賣

買壬仕候条此段布告仕候以上

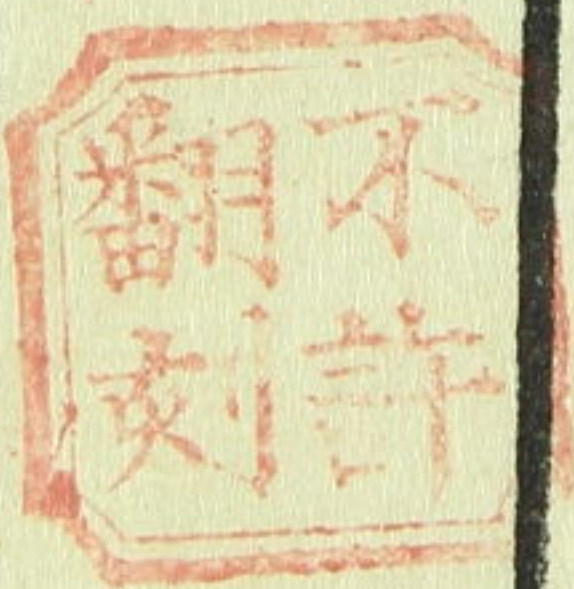
知新館告文

此社中ニ於テハ珍事并ニ諸相庭物ホヲ記
スノ本意也又館外ノ人夕リ凡功能有事ヲ
衆人ニ示サンカ或ハ書籍ホヲ彫刻セント
欲セララル、凡ハ此社中へ御示談アラバ速
力ニ發揮可致候者也

以上

知新館

慶應四年戊辰五月朔日



内外新聞

第三

第七日目毎ニ出板

知新館

神戸新聞

第五月廿三日
我至月朔日

今日ハ英國女王ノ誕生日ナリ本國ニ於テハ諸人如何ナル愉快ヲ盡シテ賀祝スルヤ例年期日ニハ上下一統兒童ノ如ク滑稽ケテ之ヲ賀セリ又夕景ニ至レハ老幼ノ別ナク郊外へ出テ快樂ヲ極ムルナルベシト彼是想像セリ
 第千八百卅七年女王即位ノ後ハ能ク民ノ心ヲ取り能ク國政ニ心ヲ用ヒラレタリ或日女王自ラセキセコボルク及ヒゴサ地ノ太子アルベルト名ヲ智トシテ以テ婚姻セントノ企ヲ布告セシキ國人太夕安堵ノ思ヒヲナシ大ニ是ヲ觀ベリ此婚ヲ結ヒシ後ハアルベルトノ盛名漸々四方へ雷鳴セリ

公自ラ諸術ニ達セルカ故ニ是ヲ國民ニ教示スルノ權ヲ取
レリ又窮民ヲ惠マント欲シ第千八百五十年ニ自ラ費用
ヲ調シテ府中ニ在ル貧民救千ヲ任マシムルノ大室ヲ管ノ
リ又千八百五十一年ノ博覧會ハ公ノ企ニ出タリ又千八百六
十二年ノ再度ノ博覧會ニハ公大ニ利益ヲ得タリ
女王ノ日記ヲ閱スルニ誓ヲ結ヒシ後ハ總テ幸福多カリシト
公在世中敢テ政事ノ一派ニモ係ラスト虽モ常ニ政府ニ
就テ女王ト國事ヲ謀レリ嗚呼公ノ死スル實ニ國家ノ為
メ惜ムヘキノ機イタニシテ女王ニ於テモ大ナル不幸フシアワセニシテ愁
傷亦云ヘカラス後女王薨々トシテ不豫故ニ種々ノ流言

巷中ニ偏子チカコロシ然トイヘドモ近來ノ報告ニテ之ヲ見ルニ漸
ニ女王快氣シ客殿ニ出テ客ヲ筵見スルノ由ヲ知り大ニ歡
喜コビノ思ヲナス是ニ基モトキテ萬更前日ニ復スルヲ願フ如
ナリ

爰ニ於テ女王ノ功德ヲ贊美スルニ公オホヤテヲ以テ是ヲ賞セハ能ク
國王ノ任ニ當レリ又私ホソクニ是ヲ賞セハ貞節ノ婦人ト云ベシ
故智アルベルトノ後嗣ヨウキ太子アルフレットハ當年北七才ナリ此公モ亦
父ノ如ク才能ヲ以テ天下ニ有名ナランヲ願フ如ナリ此公
第千八百六十三年ニテ子ニルカ國王ノ女アレキサンドラ人ヲ
娶レリ此女モ亦容兒美カホカタチニシテ生レ付秀才ナリ女王死去

三ノ二

ノ後ハ後嗣トナル可キノ賢女ナリト

方今太子アルフレットハガラテート云船ニテ日本并ニ支那
ヘノ旅中ナル可シ余等當港ニテ太子ニ遭遇ス可キヲ恐
ル

當時全權公使ハルリーパークス名海軍副總督ヘシリケツ
ペルハ大坂ニ在留ナリ此時ニ當リテ軍艦コトク尽ク當港ニ在
ラス女王ノ誕生日ニ當リテ責ノテ一隻ノ船アラハト思
フ併只女王ノ國民ニ慈悲アル難有ヲ想像スルナリ

神戸新聞

西洋第六月十日
我周四月十九日

昨夕我十四日藝州侯小舟ニ乗リ外ニ艘ノ小舟
疑疑フラクハ或ト共ニ大坂ヨリ来リ居留地ヲ距ルハタコ
小大名ナラン
五十間ノ処ニシテ行列ヲ整トシヘ米國コンシユル館ニテ
来レリ

先日中野シク當港所々ノ揚場ヘ運ヒ来レリ是ハ
定メニボントヲ造營スルノ用ナルベシ

大坂ヨリ出帆シタル多クノ軍艦ハ未タ北方ヨリ飯
サリキ解日洋人ヨリ官軍ヨリ南方ト
唱賊軍ヲ北方ト唱フ以下同之

先日旗ヲ受ケシフライナル者ハ次第ニ快氣ノ由ニ

併シ未タ傷ミハ強ク寒熱アルトナリ痲ヲ付シ日本
人ハ今ニ行衛知レズト雖^モ捕人ノ者頻リニ探索ス
ル赴ニテ犯人ノ母ト妻ハ既ニ囚^トレト成レリ犯人ノ一ニ出セリ
横濱ヨリ左ノ新聞ヲ得タリ

江戸城ハ再ヒ北方ノ手ニ入りシト且又横濱新聞ニ
委シク記シタリシ先般東下アリシ勅使某モ既ニ害
セラル由又遠カラズシテ京都近傍ニ於テ再ヒ戦争起
ルベシ會兵ノ漸々ニ近ツクニ依テ豫^メノ備ヘヲセル趣
ニテハ斯クアラシクヲ信用セリ

ス子ラー各船ナル小軍艦ハ第六月八日我岡四月十七日大坂

ヨリ来リ昨夕出帆セリ

本月六日ノ後ハ價ヲ知ルベキ報告ヲ得ズ入港ノ品
物ハ價高キガ故ニ日本ノ商人嫌フテ買ハズ又出港
モノハ生糸ト茶ノミ商ヒアリ

或報告ニ依テ次ノ事件ヲ聞得タリ

過日英太子アルフレット各人ヲ殺害セント謀リシオフ
一レル各人ハ既ニ死刑ニ處セラレシト

アビツシニ一國ノ征伐モ既ニ終リ當時英兵凱陣ノ
途上ナリ然ルニ生捕千余ヲ引卒スル一ニ就キ
憂動ヲ生セシ歎未夕歸國セズ

或ル報告ヨリ尤ノ事件ヲ拔萃セリ

龍動^地名^地第四月十五日バロック^人名ノ話ノ趣ニテハアビ

シニ^{ワボク}國王和義ヲ乞ヒシトモ又再ヒ復讐ノ兵ヲ起

ストノ信シガタキ風説アリ

第四月廿日ウオルス^國名ノ英太子アルフレット夫婦共

ニドフリ^地名^地ニ到着アリシト

此前日太子ナイト^館名ノ官ニ任セシト

第四月廿二日英國トオーストリヤト通商ノ條約ヲ

取替^カセリヘニン^人人二人捕ヘラレシト是疑フラクハボ

キニ^地ハム^名名ノ宮室ヲ燒ントノ企ニ依テナルベシ

神戸病院

第一卷ニ記セリ如ク病院の事ハ已ニ趣旨を立られ
たり乃ち左の如し

病院購金録

神戸 外國事務役所 判

病院ハ人命と保助一人種と蕃培一貧民の病て医業
と得ざる者と救助とる道おれハ國家ニ欠べりし
要務なり今茲ニ神戸ニ於て官許と請け一院と設け
貴賤の區別あり有病の者ハ来て治療と得ざる者
民ニ医業と施し聊救助の一端とせんと欲す我

と志と同する者不問多少納金つゝ人々と希望
とる者なり

病院御用掛

森 龍玄
遠藤 謹助

辰四月

前書に通り重むる有志の人ありは神戸運上所を
或ハ大坂北江戸堀一丁目會所神戸外國事務掛出張
所陸奥陽之助方と持参り有との事なり
一 醍醐大納言殿有馬へ御出途之事
一 神戸警衛柳川侯の跡津山侯より警固なり

四月六日 関東風聞

一 徳川氏慶 四月十日水戸へ發途の由りて供方左之通

梅澤弥三郎
遊 撃 隊
精 銃 隊

此度被 仰渡候箇條の内城内住居の家臣廓外へ出
づるに 御沙汰ニ付此度参謀へ御聞合相成候如
全く曲輪中而已りて半藏御門より 櫻田馬場先和
田倉内平川御門を去るづき度なり 其余御構ひ
無之由

一 静寛院宮様天障院様へ増上寺へ御開きの支となり
其餘婦人方も右ふ準し申へきとの支なり
一 軍器引渡の支へ目録と以て督府へ御渡し相成し
呂々ハ其終り成り有る由

一 北陸道より進みし官軍ハ四月二日浅草東本願寺へ
操込成りし如寺内手控りて滞留ありし同
六日同如西福寺へ引移り成りし趣なり

但し本願寺本陣ハ惣勢千二百人余と云
一 肥前の兵隊ハ粮米塩味噌十分の由なり
一 肥後の兵隊ハ四月三日白銀の邸へ着し惣勢凡五百

人程あり内三分の一ハ甲州路へ發行の趣且ツ役々の
名前尤も記と

惣督 清水数馬 目附 財津源之丞

勘定奉行 浅井新九郎

勘定方頭取 才士弥一郎

勘定方 水谷才助 物書キ 大森吉之助

一 藤堂家人数五百人余乃ち尤も記と

惣師 藤堂仁右衛門 副師 藤堂隼人

謀師 藤堂監物 番頭者頭百廿人

司令炮手 三十九人 乗馬 七足

兵糧者頭 三百八十人 砲馬 四足

一四月三日肥後勢八百人計リ千住へ着内四百人計
ハ士分リて器械本込銃兵リて兵勢壯んたり
と云其外藝州二百人若州四百人と聞也

水戸より奥州若松迄先觸馬

人足二百二十人 馬九足

右ハ水戸殿家来市川三九衛門佐藤図書朝比奈弥
太郎等年来奸悪ノ所業有之今般依 朝命嚴罰
可申付候如多人数引連奥州會津筋へ脱走ノ赴相
聞候ニ付右為追捕水戸殿人数千二百人余罷越候

条前書人馬無遲滯差出可申候以上

月日

水戸殿 目附方

常州徳田より

奥州若松迄驛々問屋中

一水戸家々来鈴木石見の儀ハ江戸市中にて酒賣
成りて居しを官軍へ召捕より千住と云所にて
獄門ニ仰付らる也

羽州の風聞

當時秋田侯の領分より庄内征討のしより津輕南部仙
臺米澤其外亀田本庄等の藩九ツ九家の兵隊屯

集せりと聞ゆ

一仙臺并薩長の兵船ハ庄内の沖ニ碇泊テイボクせりと云々又な
きとも此まゝ未と詳らあらん

一四月廿五日秋田の軍勢庄内を征せんと最上川モカミの岸
まで兵隊を進む庄内よりも之を拒らんあ謀師
松平権十郎は命して同く川岸へ出張して空
く對陣せり秋田の謀師淡江内膳急に一計を廻し
樹木は旗を縛り関トキの声を發後軍の大勢加つた
る如く見せ勢となし日暮を待つ庄内勢
ハ頻りに小兵を増し川端を守り夏先ナツサキは倍を淡江

内膳敵の動靜を察し其後を襲ひ一舉して庄
内を取らんと兵隊を分り閑道カンミチを回し峻難ケンナンをわたり
て進みし知路チヂ程遠く且つ峻ケンなるが故は行軍意は任
せぬ半途しりて曉に至りし故庄内の陣も其謀
畧ゴトと知る兵を割きこれを迎へんとせしより淡江
は軍策圖ヘツを外ハせりと此策内膳が計りし如く行りし
はなすし庄内を取らば掌を反すの易きとありしを
遺憾イカンの至りなりと聞ゆ

一庄内の領地六万石計りの地ハ既ニ縮めしりと云々
又同領酒田と云つる地ハ商人婦人等々何方へ行しや

船路卅里と云又米山峠ハ越後頸城郡刈羽郡の境と
し高田の東北長岡共板への半途よりて柏寄の
南方に當ると云く

櫻雲主人曰近來外國人ヨリ種々ノ珍説新聞
ヲ神戸長寄横濱函館ノ間ニ傳觸スルハ畢竟臨
時ニ畧械貨物ヲ賣沽シテ此舉ニ乘シ大利ヲ
射ランコトヲ喝希シテ然ルナリ右ノ件々ノ説モ
信ズルニ足ラズト雖モ今茲ニ出セルハ尚此上ニモ妄
説狂言ヲ諸方ヨリ拾ヒ集メ取捨斟酌シテ讀者
ノ為メニ知見ヲ開カント欲ス識者幸ニ了解セヨ

慶應四年戊辰五月八日

内外新聞 第四

知新館

神戶新聞ノ譯

○先頃米國帆前商船デスハツチ各船主ジヨンス名
ト日本運上所船改ノ士官共トノ際ニ起リシ事件ニ付
先月廿九日裁断アリシ訳ハ過日出版セシ新聞紙上ニ
告知セリ

船改士官共免状無キ荷物ヲ取押ヘルタメニコンシユル
外國商正ノ官各へ届ケズシテ彼ノデスハツチ船へ押テ行シコトハ
米國ノ國旗ヘ對シ不敬ニ當ルト云フヲ米國コンシユル
云立シニヨリ奉行伊藤次郎ノ命ヲ以テ右ノ士官共

ヲデスハツ子船へ差越タリ
右ノ如キ事件ハ西洋文明各國ニ於テハ甚ダ不法ノ事
ニテ有ルトソ

然ルニ船主ジヨンスヨリ兼テ申立シ同人配下ノ乗組水主
等ノ損失償金トシテ洋銀三万枚ヲ請取ント望ミシ
ハ右裁判ノ時ニハ如何ノ所置ニ相ナリシヤ更ニ知レズ
此償金ノ儀ニ付テハ横濱裁判所ニ於テ如何所置アル
ベクヤ計リ難シトイヘル和聖東地府ノ裁断所ニ飯リテ
申立トイヘル又如何トモ成リ難キ事ナリ

○太政御一新ノ後ハ徳川御征討ノ事ニ付テハ種々ノ
珍事多シ此事ハ度々我等カ會合ノ時ニ當ツテ一奇
話トモナルベシ

○過月ヨリノ政事ハ惣テ國中ヲ利スルノ外ハ他事ナ
ク日本ヲシテ西東洋大東洋大西洋ノ各國外國ト推テ等ウス
ル事ノ存念ナリ且ツ國民ヲ開化セシメ能ク外國ノ事
情ヲ知ラシメ我等初メテ日本へ来リシ時ヨリノ旧
弊ヲ改革セントノ企
○過日ヨリ交際ノ一ニ至テハ我が英國ニ深切ヲ尽ス

而巳ナラズ且各國ニモ益信情ヲ以テ交レリ

○當日二日 我閏四月十日 西洋第六月二日 ヘルミン船ノ到着ニヨツテ或ル新

聞ヲ得タリ此事イヨク實ナラバ我々カ願ヒノ如ク成

ルベシ

譯者云此ノ事件イマタ詳カナラズ後日譯者的然ノ新聞ヲ

得ルアアラハ其子細ヲ告知スベシ

○先月中浪士二人市中ニ潜伏シ居ル由諸藩邸へ布告ア

リ此者共ハ旧幕府ニテ身柄ノ者ニテ有シカ今零落スル

トイヘ凡萬一諸侯へ對シ遺恨ヲ晴スマジキモノニモアラス

因茲本月第一日 我五月十日 澤第六月一日 居留地 外國人ヨリ 神戶ヨリ 入口毎ニ警

固番所ヲ建テ無用ノ者ハ一切ニ入ルナラズ夫故兩三

日ハ遊參見物人等是迄ノ様ニ来ルヲ得ザリシ

此警固ノ番所ヲ建シ事日本人ハ諸人ヲ攘リニ入レヌ

為ナリト云ヘ凡我々英ノ推考ニテハ右ノ浪士ヲ防グ為

ニ設ケシモノナラン諸人ヲ攘リニ入レヌ為ナラハ番所毎ニ

番人一個ツ、ニテ十分ナルベシ

譯者按ズルニ此二人ノ浪士ト云ハ水戸脱走ノ内鈴木

朝比奈等ヲ探索ノ布令ナルベシ外國人ハ先年品

川東漸寺ノ變更ナトヲ思ヒ出テ斯ク云ナラン

○本月當月第二日ノ事ニテ有シ士一人居苗地キヨリウエヲ徘徊ハイクワイ

セシ如ル或ル外國人ニ突當リ直ニ腰刀ヲ拔掛タリ外國人モ

短銃ヲ出シ規ヒシカバ士ハ逃去タリ外國人モ發ホウハツ發ニハ

及バス跡ヲ追テ間近キ番所ニ至リ此次第ヲ報知セリホウシ終

二三間距離ノ處ニテ起リシ更ナレバ番人共ハ一向知ラザ

リシ如此更出來セハイゴ後ハ西洋人短銃ヲ持タズテ外出

ハ決シテナスマジニ三度モ皮様ノ士ヲ打苗タラバ少シハ止ム
トモアララン乎

兵庫新聞

○アデイリヤン欲カウシヤ商社シヤの蒸氣船シヤラーサカ御閨四月廿

四日午前十一字西洋ノ時刻兼兼港港せり此船ハ肥前侯鍋

より雇ひ雇ひひより士官士官并并兵卒兵卒凡五百人計計乗乗継継り

迎迎く横濱横濱へ出帆出帆の由
大坂之新聞

此度

朝廷朝廷ニ於於て浪花丸浪花丸より小舟小舟出出來來せり多ハ第二編

此布告此布告せり如如く江戸江戸通通好好の便利便利と云云於於て所船船下

黄	白	青
黒		赤

如图み色なり
 日本全圖の人知すんばり
 知らざるの事なり

○大坂生玉の社地又真言宗の寺十坊あり五月二
 日急ぎ立退く根被 仰付即日佛具手道具未引扱ひ
 疊建具ハ其儘に推置立去りし由
 此事件ハ今般河一新に折柄高野山に僧侶
 朝命と彼是とや互に依り被宗徒ハ互にたけ通りと

ちしとせし耳也

○南都興福寺ハ是迄の寺中三十坊ありて二万石斗
 の寺外をうろくけけ変一坊に十石ととなりて都合
 三百石と減せられし由也

○岡四月下旬よりの霖雨より淀川筋殊に外の満水
 りて五月朔日より当地より上京の船三四艘も覆せり
 其内一艘ハ船子幸らじと助里糸ハそく溺死せり
 由外の二艘ハ繫紐一人ハ多分助りしと軍中
 ○厄ヶ崎より大坂の通船一艘これハ口根出水の者ニ覆る

余程死人あつと云

洋行せし一經業師寅吉の同聞

○早竹寅吉事ハ昨丁卯年外國人ハ雇ヒ家族大聚

ト連テ横濱ト出帆一追々各國ト廻リ同年の暮頃ト

亞國サンフランスコ地へ急シ夫トより他の國へ渡らんとする

時元方初ノ寅吉を雇ひの外人の曰ク家族大勢ヲ及

雜費少クハ只兩三人ト連テ余ハ日本へ送り返さん

ト寅吉善ク之ヲ允来奉ふト於テ家族等々引連ル

約ト定ムル今更約ト變じらる事當惑する所なり

ハ返着又修々外人も然レ居ラる事ト出帆

の時いふ仕々ハ寅吉及び要用の人而已ト叙

余ハ其後殘レ居ラる洋中へ出ラる寅吉この事ト

知り大ハ憤リ刀ト拔テ彼の傷リシ外國人と切害せんト

働ラるハ是レ者又船中發動一他の乗組恐怖する故

船主も迷惑の余リ又寅吉及び元方の外人ありとも

或ル島ト上陸せしめ船ハ遙々過行ラる事其後寅吉

の生死等ト不知他日ヲ候証を得ハ布告ス

○肥前長崎田中キリシタンの宗門ニ帰依せし者共凡

二子人糸石捕られ諸藩へ分配して御願ヶ二なる由
五月朔日の頃大坂と列々との軍へ至り又此事に
就く外必固より扱ひを入むるに在り

京都く新聞

○京都裁判所事 京都府と改めお成

京都府 府知事 長谷宰相

判 事 青山小三郎

判 事 松田正人

○丹次山家谷大隈元京を交へたりりけし帝洛西

西院村は格く屋舗と得らしたる

○根及地黄の類は能く日向守も柳る備後小治の國に
為交と多連らるの支度あり

○閏月下旬よりの大雨水桂川出水所へ橋を流下
らう浸伏見の町も押水来りて舟を以て性本せり
け霖雨のためは麦菜種多泥水と印る悉く芽を吹
んとを仇之農人多大に憂悲せり

又鳥丸姉小路の人家裏町の地形低き故に地境之言
を同斗り石垣を築上り

三系よりわく鳥丸交替所の
地境を低めたり家毎に同し
す上り

去茲と違りたりし如け許の大兩とて石垣崩れ去る急忽
ち倒れ裏町の地處ありし小家と押潰せり事ひく
しと救傷の人を無りけりといはる人々の家作垣わたり
と付て事なり依りて周る布告する所也

○去二月廿日大和太孫 世人繩よの四より外國人參
朝の時英人は對し又傷及及び一林田貞賢は遺骸を
洛東なる善寺の南なる伽藍親善といふ寺に埋葬あり
教諭有志の者ハけ寺に玉を花を供し水とる向るも事なり
しがけ許に玉り日水の東なる又山に改葬する由也

船橋表戦卒の新聞

○閏四月二日の曉下総ふ中山八幡に屯集せし戦卒の
孫堂後前須卒の三子一黒楯と後一掃陣とてさき首と
述べし孫を共々其母も知らずをんばふかき戦卒ももて成り
と乍候の人教より筑前藩の宿陣所西園回向院へ報知あり
依りて同所より総督府達し是直に先陣百余人と練出
し其徳又名陣と後陣も統て出陣し是又百人余りて
行徳川と隔て和野村に陣とあり一隊軍船路とありて
江戸表丸入とありたりと人々と迎迎の村を探索しあり

を成し兵糧と食しなり 此時より砲丸を遣はりて
既先子戦事及ぶる筑前兵隊の先子村と後一行
徳より薩長勢と一子となりて八幡中ふさく進軍せり
薩兵い中山より引返し去り村を吟味して軍を進
む筑前の兵隊へ来て中刻船橋宿に宿陣せしりとも
佐土原の兵隊筑前の先子の先子戦事終りしる備
三子一同に船橋に宿陣しととも
昨日先子の戦事ハ小迫合なり筑前の先子小幡を
押行し知城兵ふさく突出し敵合計十名内外その

砲丸なるが故筑前兵隊の野戦砲二發打せし火門と云ふ
二門も打撃甚小銃とりつゝ敵味方とも散兵と成て
迫合なり筑前の先子の討死銃士も小幡三人も真九人
城兵の佐倉街道大和田宿より山子へ引返さしりとも
昨日官軍への討死も死ふ多かりし事と云ふ
聖四日薩長勢佐土原勢小人殺し本更津の方へ兵
を出し筑前勢も後援の命を交し故に流れて進軍せ
ざる時先子の二藩を推殺したる報となりて筑前藩
の御守人は塞ぐべしと兵衆大に憤激すとの事
中宮

御守衛の命を蒙りて敢て進み籠りしに
之と縁一ト先兵隊と引纏め申す刻に至りしに
一引揚其旨と進進及び同所
今と傍々其後の御下知持居りしとや

野の常及一通り取次せんしんの勢と軍て下総の地

閏四月四日の日付にて系於小杉を系來村に字

八幡宿に出張し官軍稲田藩より阿波なるも
後亦もて有る外に外に百人中り三ヶ所
集りし東軍を合戦し降参りし武蔵の勢と軍て下総の地

イヤと申す破滅を有りし根子連は三日未だに東軍才

より八幡宿中切の市川に退却し官軍一ト手出張

方々夫と一たに大合戦を成り官軍大破也市川を打ち

て散るに逃去り南風大烈愛一時に大空を成り市川を

焼失致し大砲四挺小筒數十挺を奪ひしに

分五ラレしと申す又三日船より官軍と築前侯人殺一組

百人後死三隊行徳をり船打ち出陣して産出惣人殺一組

外八幡宿内海と船を奪取し船打ち出陣して産出惣人殺一組

仇倉侯の人殺東軍が勢内へ山登致有り又うの夏に

結國と云ふは、今倭赤方古民徳川氏二百年の治澤と甘
どて旧幕を祖偏倚の情態より出する書面取回し一二の事あり
有る多し信じてかゝる事也一加之作念慮を東京に加せし
の事或又城を德計の流言もあり予も今採り記す所の
國を人懐控考の二つもあれしと云々讀者幸かむ身ぢれ

江戸表田四月七日出し書状中抜也

一 兼文と通じ間より市川行徳八幡田し戦争連日
安江より僅四八里位し星程に遠し炮轟お驚き夜
分下船の方角天色赤くん白く今も兵火の

村に於て焼失致しはる多し實に驚く爰に振る
一 當地浪人凡千五百人餘り結成大将ハ福松八郎を
と若る在結の内、追々外分浮浪俸者寄集
二千人数もお成り由國東地を浮浪共勢殊く和ら
るお成り上ハ何てお運中々容易に強敵も不
何とも思入活方と云ふ

一 江戸表分友軍目下結地は繰出し出強お成り下結
丑人民の都に江戸に逃来り城市中混雜人氣殊く
發安安心を成思入中

一 上野宮様由十九日午後奥より京師、山内、至終、
 御前御紙分百姓始、江戸下谷町人共一同、江戸
 系引止、款、書、出、日、夜、混、雜、成、り、此、身、尚、時、當
 沖城、江戸人、多、く、上、り、又、宮様、御、上、系、と、稱、す、り
 大、変、と、て、江戸、中、務、と、表、事、と、稱、す、り

一 張紙、或、暗殺、の、首、を、肆、し、い、等、と、多、く、毎、日、請、方、お、き、
 り、其、混、雜、の、子、ど、と、そ、七、月、こ、と、多、く、市、中、町、人、在、
 立、行、出、来、が、て、り、ど、き、く、流、言、を、少、法、等、の、聲、と、
 一 水戸藩、終、本、石、見、其、間、水、戸、城、下、お、あ、り、多、く、前、諸、君、に

外、と、多、く、人、多、く、強、こ、う、中、々、是、ハ、市、川、三、太、ろ、の、ま、り、と、多、く、成、け、
 人、の、先、日、戦、後、も、一、脱、走、後、も、再、び、立、向、り、と、多、く、風、情、の、
 在、り、い、こ、り、と、多、く、
 論、者、曰、先、日、終、本、石、見、江戸、市、中、潜、伏、し、居、る、と、
 官、軍、を、捕、へ、千、餘、人、と、稱、す、り、梟、首、と、稱、す、り、行、く、と、
 風、情、を、好、む、而、て、今、ま、と、衣、く、風、情、を、好、む、情、を、
 前、日、の、風、情、の、虚、を、多、く、或、ハ、今、日、の、風、情、を、多、く、
 其、日、の、風、情、を、信、じ、り、何、と、信、じ、り、と、多、く、虚、の、中、に、其、
 確、説、を、得、る、と、多、く、

確説を得るといふ

こつ果と

論者曰上野官の河内系と以て是止り然出らむとの
情態或は實多きをんコトイキ 派津軍艦出の城借の情
及の小田系、疾判箱拒性本絶切と令ヤウ 虚脱を
會城とのふも此スチ 不條理の艦動の致とぐカク 派津軍
信託をぐ東海樞要の衝道二日をせぬカナメ 一々確
根京師の達をばり且令津赤く軍艦を持しと
ふや旧幕府のもこれと借り交へるふや此中目録
中ハ大を法辭なりカク 旧幕長何ぞ此カク 形勢あらん

四十五

油掛阿予等赤く町名も及及る或ハ誤字を強
紙々文何ぞ不束を蓋し実多きをカク 格々殊暴
者の西島園より急艦の脱を了カク 要々派津不
の救脱何ぞも憑虚の脱安を信とく人カク 也

田四月廿七日戦後高田辺四く戦争あり
予等尚月又日其新軍を得たり

○旧幕府脱走人其家院浪後鯨波地カク 市カク 西カク 屯集強
在り官軍とお拒カク るカク 舟田四月廿六日夜半カク 長州参
孫系が加州出強カク 監軍カク 明廿七日曉人教孫出カク 方示候

四十六

あり幻廿七日早天加州勢と高田勢と引纏ひかか
隊長水上隊隊長長富隊長本隊小隊
線波よりいふおまき丁斗と後中を線波と砲發及及
浪人方より戦戦双方奮砲砲發砲發程加及勢もと
内陸長勢と線波と焼打波一飲四丁斗引連キ
官軍勢勢速く進み頻りに及及攻勢と受敵た
の山は嶺キ松原の切取と潜伏し大小砲打立は付加州勢
堀中隊隊打進て彼山の下の小高と所積サ新は掃リ
小銃者打立は付浮浪輩を松原の切取と保

ふは控去りて彼の山を戦く彼を加州堀等と勝利ハ
吹立進く山と江進く水と隊と隊と隊と隊と隊と
おどり大砲等打立お進く産長及いふ田勢もあ
進撃しお官軍勝利出奔しと線波ととお成
打立賊首級殺多しと未と愼とふれか官軍も
手負ふ多しと何と格別を成も成しと
板加州の兼る情弱の世評もわしと今殺初を戦争
は兵士の進退聚散各其別とわしと大勝利の天信成
手隙を真に人目を驚くせり其破一藩前後の汚穢と

四十七号

雪ぐは是きつとらん

猶内外の新軍を紀えんと欲とて出版の終日あまげは第五

二布告とぞ

因二日先殺發行せし新聞の第一を見そく粗濁のとのあり
絶板してもよかどぞと押と辨解ある由なり是亦爾底を遂ふ
猶師山と見えとのる傍々等しく新聞の新聞なる所以を
知らざる偏頗の端なり粗濁を厭はるる新聞の亦詮を
失ふるやりの向後とも粗濁杜撰の事件なきを確たる
なり是等の微たる事ハ知識の尤めざる亦やと敢ふ
集者も又敢らんと止るを



慶應四年戊辰五月十五日

内外新聞 第五

知新館

内外新聞第五

神戸新聞譯

第六月廿日
我五月四日

○方今ニ至リテハ當地ニ居留スル人民稍蕃殖セリ然ルニ余等甚ダ病ル如ハ當地ノ路傍并溝中等諸所ニ不潔ノ物塵芥多ク此為一頃日流行セルコレラ病追々傳染シテ速カニ減スマジ就テハ早速政府工願達シテ不潔ノ物ヲ取除カンコトヲ欲ス

土地ノ氣候ニ馴レザレバ万事配意スヘシ先日ヨ

五月廿三日

五月廿三日

リ雇ヒノ不淨物掃除ノ番人ハ甚懶惰ニシテカ
ヲ用ヒズ尚精出スベキヲ諭サント欲ス掘切ニ埋
レ込ミタル塵芥及ヒ屑石土砂等ヲ掃除ニ是
ヲ海邊ニ運サシメシ若此類濕氣ト暑氣ト混シ
ナバ更ニ惡臭ヲ生ジ大暑ノ時分人身疾疫ノ
害ヲ為サン

大坂ヨリノ報告

○當方居留地ハ政府ノ監察出張シテ多勢ノ
雇夫ヲ指揮シ大ニカヲ尽セリ此趣ニテハ遠カ

ラズ成就スベシ

○外國人市中雜居ノ免許アリシ上ハ政府ニ於

テ高價ニテ地所ヲ買上ベカラザルヲ察セリ

○過シニヶ月ノ頃銅錢ニ倍ニ騰貴セリ以前十二

文錢ヲ以テ天保一文ニ換シ今六文ヲ以テ

一文ニ替ユル先年来多分ノ銅錢ヲ支那工運送

セシモ爰ニ於テ止ルベシ

賣買物相場入港物

○諸品相場ハ先日ヨリ衰リナシ頃日連日ノ

雨天ニテ日本商人品物引取等ニ大ニ困リ入り
居レリ當節賣品ハ黒吳呂并ニ短キライフル
統ノ外注文更ニナシ

出港物

チタ十ムレンツダイノ生糸少々先日ノ價ヲ以
テ買入レシ當時賣品甚ダ少ク殊ニ望ミニ應ゼズ
次第ニ新糸ノ時節ニ至リ今廿日余ヲ過ギナ
バ新糸入来ルベシト余等頗ニ此ヲ待テリ
奥州百斤付 五百廿兩ヨリ五百卅五兩マテ

ソダイ

四百五十兩ヨリ 四百七十兩マテ

越前

四百十兩ヨリ 四百廿五兩マテ

茶モ遠カラズ新茶入来ルベシ當時ノ新茶ハ

古葉ヲ交ヘ又ハ見カケ見苦シケレバ甚ダ此ヲ

嫌ヘリ此見カケノ悪シキユヘンハ急速ニ仕出シ

セントシテ製法行届カザルガ故ナリ

前日買込タル新茶ノ價ハ甚ダ不相應ナレバ今

爰ニ茶ノ價ヲ記サズ

○薩長ノ兵隊新馮工着ノ由ヲ聞リ此ノ實ニシ

テ且勝利ヲ得ルニ至ラバ外國人ヲシテ彼地カノチ移エ任ジスルコトヲ得ベシ既ニ彼地カノチ居苗場ノ用意ヨウイセラレシ由ヲ聞リ此後ヨキ報告ヲ得バ或商人ヲ伴テ速ニ彼所ニ赴クベシ

○第六月廿四日 我五月五日 今朝テスパツチ着ニ依テ本月十七日 我閏四月廿七日 新聞紙ヲ得テ左ノ事

件ヲ拔萃セリ 昨日數多ノ兵隊ヲ乗セテカバノカミ 船江戸ヨリ来リ港中ニ碇泊シ南方ニ運送スル人救并

食料等ヲ積込タリ米國全權公使ハ同國イロクオイス各船ノ船將ト一致シテ小舟ヲ以テ水師ヲ送レリ

○三條大納言殿ハ先ニ徳川家トノ間ニ起リタル大難事件ヲ裁断スルノ全權ヲ蒙ラレ京師ヨリ發シ水曜日江戸エ着セラレシ

○第六月廿五日 我五月六日 米國飛脚船コスタリカ名横濱ヨリ長崎上海エノ便ニ當月卅日 我五月十一日 當港正着一昼夜碇泊スベシ旅人并荷物等

有ラバ神カウベ戸スミツ、ベニヤチウークル社中ニヤチウマデ申来
ルベシ

○長サ二十六尺ノ小舟グツテイラ一隻サウホ帆ホ柁カイ并日覆ヒオ等
備ソバリタルモノヲ賣ウリハス拂ハスニコトヲ欲ホツス若モシカハ買カント欲ホツセ
ハ神カウベ戸ジーテ。カルル社中ニヤチウマデ申来ルベシ

以上

四月下旬越後より信州路と經て

京師、来りて孫タビヒト若モの物結モノムス

○脱ダツ走マく歩ア兵ヘ等ト飯山イヒヤヌの城下シノに來りタリ隊タ長チ古コ屋ヤ
佐サ久ク左サ門カドより城内シノに言イハ送マりタリりテ我ワ是コ是トより
松マ代シ表ウラに立タ越コ後ノ以テ故ユ此ノ昔ノ當ノ藩ノより松マ代シに應オウ
接ツ及キびミりシるニとシの儀ノより依ヨり飯山藩ノ
鈴木スズキ素スと士シと松マ代シにツてテ隊タ判ハ及キびミりシるニ
又マ松マ代シ藩ノに於ケてテ脱ダツ走マ人ト共ニと城下シノに在ア留ルせシるニ
らシるニ其ノ事ヲより大オホ強カ論ロと成ナりタルニ

五十五

鈴木系と討死たる由も不中と飯山より古包、
返答ありしうども今一應談判して吳彦く旨
絨方強て中へ付まゝして使者と松代に送りし知
松代藩より返答も不及使者代到止之直
軍勢と繰出し飯山の勢を以て事飯山守
えけも屯集の歩兵多飯山藩と手筈を合し
千曲川を隔て防戦及及なり然るも松代勢より
絨隊に打掛る銃砲より怪我人れども飯山勢に
打出も時人々と扱ども松子なく又飯山の兵隊を

松代勢に突く時も同扱なり爰又於て絨兵等
不審と生し潜り飯山の陣と窺せし小果し
双方より空砲を打合居り依之絨軍初めし繰
針又陥入るを曉る大に怒り忽ち飯山の兵隊に
砲發し戦争に及ぶととも双方より打立られ
終り飯山一飯山城下真宗寺と云寺院に逃込
り松代勢引続る押寄せ大砲を打込るまは
此亦も遠く親く城下の民家へ火を放ち煙を
きく乱妨を働きて越後路に放走を松代飯山

兵を合し追討し大に勝利を博する由
傳へ曰く五前松代にて鈴木系を討たし
再度の使者を止めしるも兩藩内儀の謀計
にて城を欺きたるなりと云

右の歩兵等初め高田へ来り荒井村と云ふ所
集せし内は惣兵又百人の内百三四十人飯山へ
至り又追ひ荒井村より飯山へ應援の爲に繰出
一時は級軍して再び荒井村に逆集りしに
高田藩及び信州勢は打立てしに罷置長持杯

打撃を散れし退きたる隊長古屋統久たる
は落行中徳源と云ふ者ハ討ちし由

上州権田表平定の況

○旧幕府旗本より外國奉行たる小栗
上野より上州松井田より三里の程に
つり領地ニ到籍り居るなり此所は
昔より其間あるに因り四月上旬高崎藩安中藩
外一藩不等に討ちの命を蒙り破地へ發向し
及ひ上野より津伏器械を官軍に請ふ事故

平定せりと

又説又同四月七日高崎安中二藩より人教を
向上野女及び嫡子亦一節を擒錮して同九日
岩倉殿の所陳武忍に送りし

二説大同小異何をまを初に
両説を記して世人の辨別を待つ

京都新耳

○近日江州大津裁判所を大津勘定所と改ら
せしむる

○防忍岩園吉川候と緒藩の列に加くると
武鑑にも紋繪等を記して追々
○五月十日薩忍の兵隊東方に繰出せり
同下旬三國元より計千余人の新よ上系の
風聞あり

○同九日夕七ツ時以四糸通祇園町にて馬上
の士に斬くをたす狼藉者あり然るに
馬を打外し馬の尻を切付し
馬勢あがり時と狼藉者を蹴倒し

すまじり如何なる言強なりや其来由を聞かば
他日發討の勅軍の紀とべし

○若州小湊志州鳥羽の二藩は前より至り御ふ
審の廉 御免なりしと云

○田四月下旬議定職の諸侯に官位 宣下は
作出度越前侯及ヒ肥前侯より以辭退お成
由刻尤く書付ハ越前侯より或方様に此辭
返り知せし御使者の口上を
今般議定は 作付と又從二位權中納言

宣下は 御付官位に儀は此程縁お成り
は 聞召右為以知以使者は此意に

五月三日

越前宰相使者

山野濯二

○京師下立奏通妙の寺門如何系の家
天氣快晴の時とつとも淺洗米大臣等の
何よりとも知らず降り来り由當は此
怪異縁増益夜とあり家内に熨斗絶令抄

土器に拵餅菓子燻燻紙墨筆を其精意の念
 物茶等の緒に附きて来る年今又ふ止是は金
 其家又ある法守稻荷の奇蹟なりとて此頃
 日玉くそ社と再建して尚灵應ある由と耳に
 論者曰昨夕年冬京抄及び緒玉又神符と
 降し令降諸物を降し降し怪異あり
 右の怪鏡も同日の疾しと敢て奇とて
 是れども又信じてるもあつたるごとく然り
 と之れも童幼婦女子とて知らるる事有る

見身と博くしめざるは妖人狐狸の為又
 欺るるの患ありと除うんと爰又死を

江戸町人共歎歎書の寫

自思の書付有歎歎の
 一私を云下穢く此を以思とふ願有歎歎
 人儀ハ其心幸思入る是と教奉來米
 平に御恩澤之浴し此も金
 天朝并徳川家の御恩深し此等今更今日
 くの地合下穢く目も更又有あはれ

○国四月廿七日録波の城徒共加州薩妙長州
高田勢日押詰られ放走せり則官軍透さる
追打進みひらし人知右城徒共城山側の松原まきはらに屯集
し浮浪衆うろうずと一勢いっせいお成り半途より引返し
大勢おほいさと張り官軍と拒こむ大小砲打出ぬ
官軍一回攻勢猛烈なり戦争とお承人内款
の奇計きけいニハ味方打ト一回高懸たかかけお喚よびひ待
待まちる手死てしす間道まんどうに廻まわし人救たすをも有ある
勢いきさハと打方止うちやどす濱はまに引揚ひきあげ透とる人知

款くわんよりハ尚頻なほしばしばりに放はなす及および及およびを款くわんの業わざなり
と覚さとり直ただにお向むかい激戦げきせんせり就中すなはち加妙かみょうの大砲たいぱうハ
城軍じやうぐんの必要ひつやうをすむおに打うち込こめて多おほくの死徒しと
もあある城勢じやうせい弱よわり人知地あつち敷しもる遠とほくお成なる
追撃おひきて放はなすはるる又また參孫さんそん折田平内せつだへいに
日ひ等らにお承お承れ手負ておかし者もの今日けふハ休兵しゅうへいす
と指圖さしずに及および加州かうしやう後陣ごじん二小队にせうたい繰く出でるお
志こころ先まづ津つ号ごう本陣ほんじん青海村あそむらに引揚ひきあげ款くわんハ旧
幕まくら歩兵ふへい及および素名すな提てい藩はん凡およ千人せんにん半はんもあある由

柏崎に遠く為集り以俸又其之に戦争城後
死傷多しと雖も要害又援り弾薬も多し
又々々後援打立官軍も其負多し其
之を新獲まん猛烈又戦由加州先鋒の隊
長物以高畠猪吉夫洗燈し進之総統士と励
し其魁右の肩と打貫を其負と之も引揚
と始終絶子と指揮し全く勝利を博し大
砲台隊司令格本一進も格別し切しと云
山道に進し加州勢物以格本美和助総統

子の内十八九人歎を覘打し何歎
一人了討五人由其外産長高田勢も切名ホ
みし其も委細分り兼人由

社中より布告二端

○神戸新聞譯中にあらず如くコレラコロリ病流
仍せんとする由去月己未の氣候し其波の地は
不限傳染流す由し其大抵とたに記を
獲保全あざし其大抵とたに記を
茶菜と家肉と茶菜と

又杜松子 小豆の屑と煮る
右も破る具衣類等と合し雨湿の氣を
拂ふなり 扱業のい

大柴胡湯 人の生質よりて茅硝石を煮る
加減あり

升麻葛根湯

右の類を用いしと皮肉とある雨湿の氣を拂
一飽食大酒消和あり物肉食亦用控み
一公と勞し元氣を失ふと情し
右の病をしるる用公あり委の医家同く之

三蟲油と云金瘡の妙薬

一雞卵 皮を去る 一蚯蚓 其ま

一蝸牛 殻を去る

右一種壳別と搗たぐらし 銅管の中

詰込るの如く文武火にかけて膏をと

取して後三種と合し器に入し貯ふ

右一用ゆの時其ま 疵は一流し込上と

本給りて膿と乾きと乾か何程の深瘡

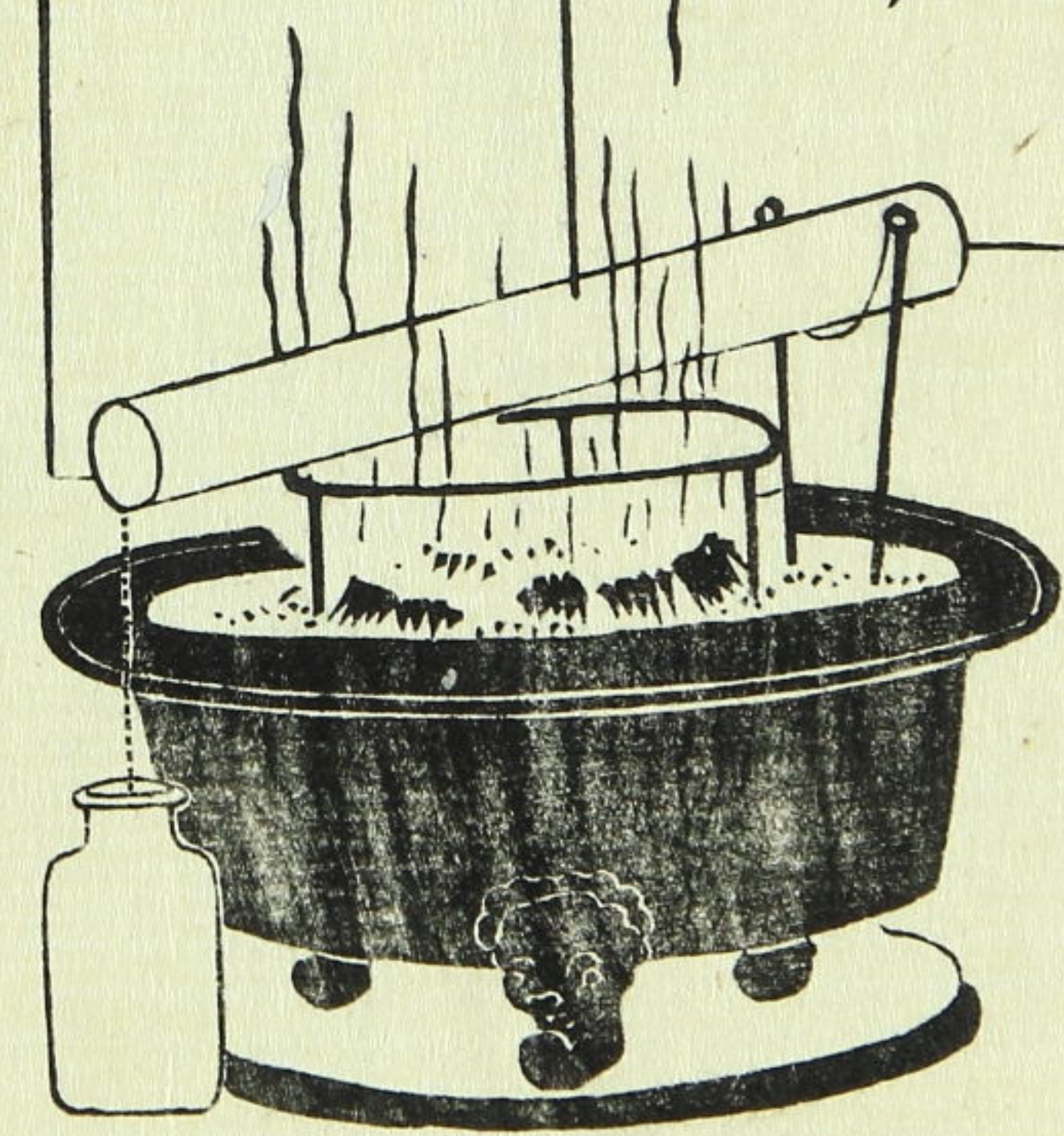
くても奇効は治る由世の好士閑暇の時

製^限衣^一 絨^二とせ^三世^四は^五經驗^六あ^七る^八を^九希^十ふ

膏^{あぶ}を取^{とる}図

洞^{あま}の管^{ごう}のま^ま中^{ちゆう}、兩^{りやう}方^{ほう}より^{より}結^{むす}込^こ火^ひこ^こう^うけ^ける^るべ^べし

管^{かん}を^をま^まめ^めく^く生^{なま}牛^{ぎゆう}も^もよ^よし



此^こ小^こは^はよ^よう^う膏^{あぶ}一^{いっ}ト^と結^{むす}ッ^つり^りを^を器^{うつ}へ^へと^とけ^けし

此^こ方^{ほう}を^をよ^よう^うき^き後^{のち}ニ^に上^あル^るべ^べし

古^こ金^{きん}五^ご支^し小^{せう}割^{かく}書^{しょ}

- 一^{いっ}朱^{しゆ}金^{きん}
 - 百^{ひやく}兩^{りやう}代^{だい} 二^に百^{ひやく}二^じ十^{じゅう}七^{しち}兩^{りやう}一^{いっ}分^{ぶん}三^{さん}朱^{しゆ}
 - 一^{いっ}兩^{りやう}代^{だい} 二^に支^し一^{いっ}分^{ぶん}十^{じゅう}四^し支^し三^{さん}七^{しち}五^ご
 - 一^{いっ}朱^{しゆ}代^{だい} 二^に朱^{しゆ}十^{じゅう}七^{しち}支^し一^{いっ}四^し八^{はち}四^し三^{さん}七^{しち}五^ご
- 古^こ金^{きん}
 - 百^{ひやく}兩^{りやう}代^{だい} 二^に百^{ひやく}六^{りく}十^{じゅう}支^し三^{さん}朱^{しゆ}
 - 一^{いっ}兩^{りやう}代^{だい} 二^に支^し二^に分^{ぶん}一^{いっ}朱^{しゆ}十^{じゅう}三^{さん}九^{きゅう}支^し三^{さん}七^{しち}五^ご
 - 二^に朱^{しゆ}代^{だい} 一^{いっ}分^{ぶん}一^{いっ}朱^{しゆ}十^{じゅう}二^に支^し七^{しち}三^{さん}四^し三^{さん}七^{しち}五^ご
- 保^ほ字^じ金^{きん}
 - 百^{ひやく}兩^{りやう}代^{だい} 三^{さん}百^{ひやく}九^{きゅう}十^{じゅう}六^{りく}支^し二^に分^{ぶん}一^{いっ}朱^{しゆ}
 - 一^{いっ}兩^{りやう}代^{だい} 三^{さん}支^し三^{さん}分^{ぶん}三^{さん}朱^{しゆ}十^{じゅう}九^{きゅう}支^し一^{いっ}二^に五^ご
 - 一^{いっ}分^{ぶん}代^{だい} 三^{さん}分^{ぶん}三^{さん}朱^{しゆ}十^{じゅう}五^ご支^し九^{きゅう}支^し六^{りく}二^に五^ご

安政
二分判

百兩代 百六十一支三朱

一兩代 一丈二分一朱ト永四十九文三七五

二分代 三分ト永五十五文九三七五

百兩代 三百十七支一分

正字金

一兩代 三丈二朱ト永四十七文五

一分代 三分ト永四十三文一二五

右の永銭とせんの時の涉まはりか多て永何文の代銭何
百何十何文と云ふを記すなり

大阪府御免

内外新聞 第六

慶應四戊辰五月 知新館

内外新聞第六

神戸新聞譯

第六月廿五日
我五月六日

○今度神戸ニ於テ病院御取建ニ相成候上ハ居留
ノ外國人モ亦差支ナク療養ヲ許スベキ旨ヲ役人
ヨリ通セリ

○病院御取建地所ハ外國人墓所ノ東方ニ當リテ
其四方ニ垣ヲ圍ルベシ尚委細ハ追々示スベシ

○米國軍艦ヒスカタクユー
名水師提督ロアン
名乗組
當月十九日長崎ニ碇泊シテ不日横濱ニ赴クベキ由也

○此項墓所邊ヲ徘徊セシニ當春大坂港口ニテ米國
軍艦ハルトホルド各乘組溺死セシ數名ノ墳墓奇蹟
ニ出来セシヲ見タリ

商用告知

○入港品物先日ヨリ惣テ相カハラズ日本商人ハ
當時大坂ニ居リ先日ヨリノ霖雨ニテ運送物等コレ
ナシ

○金巾價ハ横濱ニ於テハ相カハラズ相場書先日ノ
如シ

○武器ハ當時北方追々鎮靜ニ成シ故注文類モ沙汰
ナシ

○生糸大約二千五百斤夫々先日ノ價ヨリハ少々下直ニ
テ買込ノ約定セリ併當港持込ノ品ハ霖雨ニ至テ僅
ナリ又未ダ買手無之僅ノ品物アリ

○茶ハ大坂ニテ新茶ヲ貯ルノ風聞アリ

○先日ヨリ僅ノ茶トイヘドモ高價ニテ買込タリ且
或人ヨリ二万斤ノ賣茶アルヨシヲ聞得タリ

○新茶賣人コノ間ヨリ追々當地エ着セリ併價高キ

ユへ買人未タ返答セス當地ニテノ相場ハ横濱ヨリト
ハ高シ横濱ニ於テ極上新茶百斤ニ付二十七ドルヨ
リ三十ドル迄ナリ

○當時賣買ナケレバ諸也相場書名目バカリナリ

○不日蠶卵紙賣買ノ時ニ至レリ先ツ青卵一枚ニ付
價一兩ヨリ一兩一分ニテ約束セリ但シ其紙數高ノ半

ハ金ヲ以テ買ヒ半ハ品物ト交易スベキナリ

同 第六月廿七日
我 五月八日

○過シ六ヶ月ノ間ハ内地不穩種々ノ珍事件多シ今

其大畧ヲ記ス

○大坂兵庫開港ノ儀ハ其以前衆人期限ヲ疑惑セシ

ト雖モ終ニ開港ヲ世界ニ布告セリ

○兩港開ケシ以前第一日ノ條約期限ニ違ハシ事

ヲ疑ヒ政府ヲ責ントノ企ニテ密ニ英米二國ノ軍艦數ヲ

神戸ノ港ニ来リシニ幸ニシテ難ナク港ノ初メテ開ケシ

ヲ右ノ軍艦ヨリ廿一発ヅ、砲發シテ税セリ又陸地ニ

テモ各國コンシユル館ヨリ國旗ヲ揚テ税セリ

○後程ナクシテ大政大變革ノ時トナリ一橋徳川ハ

將軍職ヲ返上シテ大坂城エ引取レリツキ 続テ戦争ニ及セシヤウ
ビ終ニ敗北シテ江戸エ飯府スルニ及ブ

○日本大皇帝ハ自ラ政權ヲ執ノ令ヲ全國エ布告セラレ

太政官ヲ營マレ又開港地エハ夫々官舎ヲ取建ラレリ且

又此時條約取結ビシ各國エ

敷慰ノ趣ヲ布告セラレシ

○當時政府ニ於テ大坂港口ノ船路綿密ニ結搆ナキニ

ヨリ第一月十一日米國ノ豪雄ナル水師提督某并ニ十

人ノ水夫等此川口ニ於テ波浪ノ為ニ舟ヲ覆没シ終ニ

非命ノ死ヲ遂タリ爰ニ於テ外國人一統其不幸ノ災

害ヲ哀傷セリ

○続テ又京坂不穩ヨリシテ大坂在留ノ外國人ハ盡

ク逃去レリ

○北方軍艦ハ兵庫港ニテ南方軍艦ヲ取囲ノリ徳川軍艦ヨリ

薩州ノ軍艦ニ發砲

○南方軍艦ハ逃去リ北方軍艦ハ江戸エ出帆セリ

○第二月四日備前兵隊ト英兵ト大坂街道ニ於テ争ニ

○英米二國ノ兵ヲ以テ神戸ヲ固^{カタ}メシ

○京師ヨリ當港エ 勅使着ノ^{ツキ}続テ鎮定セシ

○森山某^{旧幕ノ臣カ}并ニ後士等江戸エ出立ノ

○第三月二日備前兵隊司令士池田伊勢^{ハ子クビ}刎頸ノ事此

人司令官トシテ外國人エ砲發スベキノ^{レイ}令ヲ下セル^{トカ}外ニ

依^{ヨリ}テナリ

○同十五日外國人再ビ大坂官舎ニ立戻レリ

○後又堺港ニ於テ外國人ヲ暴殺セシ

○京都ニ於テ

大皇帝エ拜謁セント参^{サシ}内ノ途中浪人共警固ノ

士エ乱暴ニ及ヒシ

○英國全權公使ハルリーパークス江戸エ出立ノ

○大政復古ノ初ノ煩雜ニテ諸人通商スル^{ツレシマウ}能ハス其後

稍鎮靜シテ商艦等モ来着セシヲ報知セリ

○ハルリーパークスヨリ

大皇帝エ存書ヲ建白セリ^{ケンバク}此ハ日本人ハ勿論外國人ニ

テモ甚ダ懇親ノ至リナリト云

○余等大坂兵庫ノ兩港此後ノ勢ヲ考ルニ大坂ハ交易

第一ノ場所ト成ベシ唯願クハ日本人追々外國人ト割
合ヒ旧習ノ惡風ヲ改メ盛ニ通商ノ行レニテヲ

○大政變革等ニ就キ暫時ノ間万機廢絶セシカ故ニ
無擾居留地今以テ成就セザルヲ筆記スルハ余等甚ダ

悲痛ノ思ヒヲ成セリ此後ハ一日モ早ク成就シ且兼テ
歎息セシ支件ノ恢復ヲ見ンテ頻リニ願フ所ナリ

○後六ヶ月ハ万宜キニ赴キ過シ六ヶ月ノ憂度ニ
平均センテヲ願フ

○頃日外國人ノ家作且日本人ノ開店等惣テ改革ノ
赴ヲ見レバ粗後來ノ有様ハ推察セラレリ

○余等今當港ト上海ノ間ヲ往來シ長崎ニ立寄ル
ベキ蒸氣船ヲ製センテヲ企居レリ

以上

大坂新聞

○旧幕府軍艦の内留士山と唱ゆる船ハ尚五月
九日神戸表に着船せし由余の軍艦開陽廻天

其外二艘斗ハ徳川氏に社下墨余ハそく
朝廷ニ附屬せし由の風聞

○今般政俸職制河改付

大坂裁判所総督御免
大坂府知事佐々木作付

醍醐大納言

日判吏
播磨景播守那村支配兼常

岩下佐次右衛門

日判吏

長谷川仁左衛門

日判吏
堺左勤

小河孫左衛門

日判吏

税所長右衛門
伊丹衣宗大進

播磨景播守那村代官免

内海多次郎

○和忍初潔古奉堂善坊舎十五六新築り町家ハ
大半流失せる由大和が亦善る人の作なり

京都新軍

○第四編又布告せし五月朔日渡川筋難船の
時糸組の内又中京又住める人なるが金子六百兩
所持し大坂よりけ船又繋りしが兼て不慮乃
用公せしや携へたる糸の内は金子四百兩をいれ
繩にて股と結び條の繩を長くして俵俵と結び
付残る二百兩金子ハ桐巻に納め疾く衣類も税

へき交度しそそ船の渡るや言や張る大河を渡
 ごとく渡又遠上りける時衆組の者溺るありて人
 小五り付くる者三人とを救ひし由水練をゆくと
 ありし故をさぐるれ共心操のよ記は依て人命四ツと全
 子六百両を全くせし高運の人なりそ佐下と名ハ
 ずねざりし

○洛東祇園社牛頭天王の神号は瘡止りてたの
 通マ心は肯祇園舎参式のみと就て小舎人組色
 より氏子の町に通達せり

神速素盞鳴尊

八柱御子命 勇三女八柱命
 榊稻田媛命

至四月廿日 羽呂よりの書状申扱去

○去月十日真呂仙臺表より羽呂庄内征討費
 向指探り致方総督府より出達にお成を参殊産
 大山格し助會計方と藝林丸馬右弁并に産長共
 隊別率より出三郷様共二十日仙臺出参隊同
 夜増田宿陣出兩郷様ハけ組より出滞陣十四日

和以登途是より羽及郷乃日夜村田以宿陣十五日
笹谷以宿陣以和真羽及圍之地界以宿陣十六日
新山宿園後寺以宿陣十七日山形城下以宿
水野上ノ山伊豆守以宿陣十八九日門以宿陣
去以宿 中澤長始諸藩練兵以宿陣十九日天臺以宿陣
大田着陣廿日廿一日以宿陣在廿二日尾花沢以宿陣
廿三日新庄表以宿陣
右先日より庄内の城後より界清水口に八百人
練出兵防戦より用を嚴重より頼れ少く付同夕

藤長兵隊重立以その法本に兵出法杯を下之
直に清川表に練出以武河旗奉行とて徳川
上野支士隊押出以知廿四日未明より戦争お成
以新大畧た之
最初大に村く先之より山の上又練軍屯以知たラ
討退ヶ不殘法川に引退キ嚴重防戦の操子くる同
如至る要害之地より最上川羽尾川に狭り杉林を
小指より力り以林中より進退掛引つて城後矢坂
宜敷地理を不便利より強苦戦より知右羽尾川を

後リ城屯集く後ノ山より馳登り之れ城徒ハ尚格
林之隈を退出彼自軍之引官軍接戦を決定
追くお進み如右林中より密炮如雨以時休候系
之れ死傷出来内四人ハ重之療養致し之れ退日
全快の事と云ふ如右終日地戦し熱軍一下先
繰上ケ同夜中退く新庄表に陣取くお成り秀細
中上及し別又日記もあきく以る退り了中ノ古光
荒増とて後右ニ付直三日流気と云ふ以上諸家
應援去程但後ハ如退玉小藩殊之不練く出故

一とく角因循遅延在ハ如至四月四日夜城徒八百
餘人天臺表に不意に押出之ハ如城市中共ニ焼燬
燬くお成りハ同ハ隊長兼子勢又七人も討死
致ハ右燒拂盡く山形に押寄り由之退り以奉
陣取くハお進み楯岡に廻り以之付又日新藩長各
隊繰出し之れ新庄人数も繰出し尾死込と
出云双方射陣在立ハ以之上陣内旗奉行と
し之強戦ハ昨日小桑及又手と交代致ハ如
味方ハ五名少人数四人請家援兵お侍ハ内海昨日

岩城之人數到着、後依竹惣勢二子又百程南
 船も出立、仙臺表より山形迄繰上筑
 前無隊も此等到着、山形も出立、大々参練盛
 成中、酒田渡へ軍艦到着、風軍越後へ
 加兵始、清原兵討入、由右風吹、昨日吹、相忌
 尾花沢出張、城後退、散乱、様子、此等、は様子
 多、庄内、討入、不遠、と、愚考、仕、以、大、候、候、以
 危、各、内、安心、下、成、下、以、以、今、尾、花、沢、より、報、知、如、是
 城軍一同逃去、船も、舟、由、浪、進、以、産、以

水越風聞

○閏四月廿七日の報告、既、前、新聞、載、り
 其後、往、来、の、報、知、を、得、と、風、軍、あり、廿七日
 後、も、引、続、き、戦、争、の、交、戦、方、野、交、防、戦、り、官
 軍、諸、藩、大、々、を、以、て、苦、戦、可、い、と、云、然、し、大、傷
 利、も、て、遂、小、城、の、巢、窟、柏、崎、も、棄、去、城、後、ハ、漸、く
 少、方、之、落、退、を、以、て、し、
 ○尤、の、事、件、ハ、前、月、六、日、夜、彼、の、地、より、の、報、告
 と、し、来、る、事、を、詳、し、く、と、り、得、と

拍崎迫込あつち亦また落葉おちばの城後追討しろごしのしも推谷おしの
 へ高田勢たかたのせい長勢ながせい妙法寺みょうぼうじの方かたへ加州勢かすのせい
 三方さんぱうのしん配けいししく惣軍そうぐん六日むつき新辰しんしんのしん外がわと都みやこして
 縹岫せうきうと推谷おし谷やの城後しろごし長勢ながせいのしん後ご交まじ攻こう戦せん城じやう
 後ご級きゆう走しゆうままるる当あた進撃しんげきして推谷おし丑うしヤヤ々々押おし造ぞうるる由よし
 妙法寺みょうぼうじの方かたへしん劍けん村むらとしん幸さい營えいとしんして三さん倍ばい又また
 分ぶんをを進撃しんげきし城後しろごし討うち拂はらるる交まじ勢せい助すけお戦たたかとしん討うちも
 城後しろごし追おし撃げきるる級きゆう走しゆうせせるる子こ岩いわ愛あい戦せん争そうすすままららしし
 ら多おほししく長なが岳たけの方かたへ級きゆう走しゆうすす妙法みょうぼう寺じと迫おし込こハ一人ひとり

の城しろも潜ひそりひそりひそどど踐ふりふををくく引退ひきひきをを官軍くわんぐん勢せいも例れい
 又また後ごにに勝利しやうりのしん勦せんとしん奏そうせせままとと

関東風聞

○徳川慶喜とくがわけいき恭順きゆうんの實効じつこうお殿おん是こゝ人ひと故ゆゑをを家いへ祀まつ
 先まづよりの勤勞きんらうも不な足たり為な控かま寛かん大だいくく成なり正ただ宗むねをを以もつ
 て家名いへなお統と格かく祿ろく城地じやうぢも追おしく河沙かしか法はふ能なり作しやう出しゅへ
 きき如ごと回くわい旋せん下げ及およぶ真羽まは及およぶ五ご彩さいの徒と共とも深ふかき
 河仁恤かにじゆの朝あさををもも辨わ分ぶん為な遠とほしして脱走だつそうしし亦また
 又また屯集とんじやく

船の早く在寛大の 河江意を喻したる
 三のちうり ○先月下旬に相州生糸新湊に旧幕
 終幸遊覧隊名二百人強も上陸し一夫より送る
 甲府之關入せしぬ高所甲府取締方江津水陸
 家中の者共制をせし却る肉通せし故今殺
 水野家へ急を 河江はく強も其いし
 相冥赤兎徳今以強静すしきり上より甲及び
 もケ根の事出来たるを其より 河多事の折
 括之強回漸以縮の功弁なり 冀くは大小

侯伯能く有る事
 朝意を家中領内士民一統に賦しなりし事又
 為重ゆは遠なるを換布告ありたる事との事等
 将多し其井姓の憂又堪ず恭望奉る事
 上海之滞在の友人が報知
 ○上海のいけ糸コレラ病大流行して死人多し
 其勢又てい糸の日本各地にも傳播せんうと恐怖の
 至り之全く不養生よりして傳播する故食禁も其
 生法をたに死に送るものなり

才一我家を掃除して清浄なるを行要之熱して
 風のぬる換として我体も故土奇毒日よと一義之
 病のむごうけりぬ後と足と温め敷具を着て十分
 汗を五静として思ふを省くべし 柿物第一房なり
 人多く集る所立寄るや 食禁油物 熱せざる菓物
 熱る卵を拵る魚色青き魚 鱈 鱈 鱈 鱈 鱈 鱈
 西丸 まつら きらら 柿 梨 此等の所不変る食らぬ
 うはは何をも記して腐りたるもの 例と立寄るなり
 衣の大概等又記すと終る今又報知と後と再び載

慶應四年戊辰五月

内外新聞第七

七日目毎出版 知新館



内外新聞第七

神戸新聞譯

洋曆第七月一日
皇曆五月十二日

○過シスギ日曜チヨコウ日九日我五月ア或ワル外クワイ國人コクジン等ラ布引スノビキノ滝タキへ行ユキ

水ヲ試シニシニ其中シヨキノ一人コノハ游ウツキヲ好コノマズ只水溜タミツタニリエ入カレテ彼

是スセシニ水勢スイセイハゲ劇アヤリシクシテ誤シテ深水シンスイへ溺オボレ込コミタリシニ

漸ヤ々ク岩石ガンセキニ挿スガリ付アゲ大声オホコエヲ揚タテ助タ人タスケヲ乞コヘリ時トキニ茶

店キウツクニ休ユウ息ヒシセシ友人ユウジン等ハシ走ハシリ来クリ直スニ水中トビイへ飛トビ入イリ棒ボウ

繩ナ等ナヲ投ナテ以テ彼ノ溺オボシ人ヲ引ヒ上リタリ

此コノ溺オボ人レモ水中ニ於テ熊クマク注チウ意イセルナラハ斯カル過クワ失シツハ有アマ

ジキモノナリ余等察スルニ此後ハ水ヲ嫌フナルベシ
○甚ダ愛憐深キ余等ノ支配人ハ今度兵庫大坂神
戸ノ全權ヲ命ゼラレ國王ヨリ改テ印章ヲタマハリシト
余等此事ヲ聞テ太ダ喜悅ノ思ヒヲナセリ

大坂ヨリノ新聞

○前月廿三日 我五月 夜十人計ノ強盗双刀ヲ帶ヒ
居留所近辺ノ日本人家へ入り金子二千兩ヲ奪取
リシト

○米國飛脚船 コスタリカ 船ノ来着ニ依テ前月三日

マデノサンフランシスコノ記事ヲ得タリ

○日本軍艦富士山ハ今度大坂へ来レリ併シ持主ハ前
日ニ違へリ破泊場所ハ當春南方ヲ襲ヒシ時破泊
セシ如ナリ

第七月二日
我五月十三日

○米國飛脚船ノ着ニ依テ尤ノ重大事件ヲ聞得タリ
合衆國大統領シヨンソン 名ハ勤務ノ過失アリテ放官
サレシト是ニ依テ争端モ開ク可キヲイエムスタン
各人尽カシテ止ミタリト

大紗領後嗣ハ評議役ノ撰挙ニ依テゼ子ラル官スチヨ

ヒールド人ニ決定セリ

共和政治社中ノ撰挙ハゼ子ラル官ガラント人ヲ以テ大

統領ニ充テコルフアウクス人ヲ以テ副統領トセント欲ス

之ニ依テ来ル第七月四日ニ大會合アルベシ

大紗領ノ大任ニ充ランヲ希望スル人々ハ裁判役總

督ニテチヤス欲死ニセーモール名人等也此ノチヤス人

ナル者ハ當時國中ニテノ有名ナル豪傑ナレハ或ハ

大権ノ帰ス可キヲ察セリ

右人撰ノ大會合アラバ恐クハ戦争ヲ開クベキ機會

ニ至ランヲ思ヘリ

○頃日双刀ヲ帶タル日本人ポルトガル人ジヨセフ一スカ

ラナ名ノ酒店へ入り酒ヲ与ヘントヲ乞シガ既ニ酪

ノ体ナレバ主人是ヲ肯ンセザリシニ頻リニ巧フニ依

テ一瓶ヲ与ヘケリ暫時ニ飲ミ終リ再ビ巧シカドモ

今ハ主人与ヘザリケレバ彼ノ日本人大ニ怒リ刀ニ手ヲ

掛ケ已ニ抜ントスルヲ見テ主人ジヨセフ人早クモ飛カ

ハリ刀ヲ奪取リ大音ヲ挙テ加勢人ヲ呼立ケルニ幸ヒ

此時日本取締リノ役人通行ノ折ニシテ速ニソノ刀ヲ奪取リ此乱暴人ヲ捕ヘ行ケリ

時ニポルトガルコンシユルハ在苗ナキニ依テ主人ジヨゼフヨリ米國コンシユルエ此由ヲ訴出タリ

米國コンシユルハ右ノ裁判ニ就テハ彼ノ日本人ニ刀ヲ帶ルヲ禁ジ稼人トシテ永ク是ヲ使ヒ後チ生涯追放ス可キ旨ヲ或人ニテ申出タリ後日此日本人相當ノ刑ニ處セラレバ余等悦ヲ其事ヲ記ス可シ

日本士官ハ公務ノ外ハ常ニ帶ル所ノ双刀ヲ脱却スルノ

時節ヲ余等頻ニ待ナリ

○佛國全權公使リオニコチエス名ハ轉任シテ本月廿六日

我五月七日ゼオランド名ナル砲艦ニテ當港へ着シ翌日ドブ

リークス名軍艦ニテ大坂エ行キ今日歸港セリ

同月廿九日我五月十日月曜日朝九字長崎出帆セリ此

時港内ノ軍艦ハ尽ク祝砲ヲ發セリリオニコチエスノ日本

ヲ忖ルハ實ニ在苗ノ佛人ニ於テ大ナル不幸ト云ベシ

來船

第六月廿九日ゼオランド名横濱ヨリ同廿七日オーサカ名同上

同 廿九日 キヤボガ名船 同上 同 卅日 オルカン名船 同上

第七月一日 コスダカ名船 同上

キヨハク
去船
デラ子

第六月廿九日 ソレイリス名船 横濱エ 同 ゼオラン名船 長崎エ

同 オーサカ名船 長崎上海エ 同 卅日 オルカン名船 横濱エ

同 卅日 テスパッチ名船 横濱エ 第七月二日 コスダカ名船 上海エ

以上

大坂新耳

○五月廿日南本町二丁目八百屋町小入信濃屋系之
旅宿せし小田馬之助とつる士とを捕らんと拔此
の險等々向ひしつる小馬之助ハ疾逃去里々余輩
二人とを捕まなり

祝之日小田馬之助とつる元義兵の如き者
海守清士陵武陽とつる隊長とつるが故めてを彼
を放さし系初より隊中へ送るべき金穀物を拒こ
送眼を晴さんとせし由なり近頃ハ立流又書し

七十四

家来に人をも石をいれ妻をも抱へ乗馬と列せせ
陸来せし故盜賊りてあまし一標と風評されども
全くたまたあざとせ

○過日より紀及田辺沖より東方の軍艦一二艘碇泊
せしとの風耳ありて大坂府より役人方に出張り
由巷説も色々あり拙る不紀及ふの紙の写しを
とて手入しりたし記を

前畧十三日朝和舟出碇に大船小船二艘着
亦い十八日夕和舟大船着又百人乗組石産

土肥後藩より執権より二大隊舟り系りし
様子見し門支りて山に田に逗留し鳴渡石
に大將の判書局より様子一書合意系りふりし
所及ありし内は中へ紙を下し

論者曰右の書面の信否は知らざれども又入
しりまは姑く爰に載て報告の情を多し行つ

○第四編に記せし経業師寅吉の始末を述べる書
面と抜萃しりたし奉る

此卯八月十八日アメリカ國の船分サンフランシスコへ着し

真行せし二日と故障あり初日より金主の外五人
 種々難題を云掛りて夏六弟は家族八人の母を以て上
 サラフラスコは依せ並サノゼ地よりニゴトクトニ後リ夫
 よりサクラメントに後リたる小島又人殺滅し其由を金
 主より去りけり又寅吉大に立後し最良迄答に及こ
 せんば金主もサラフラスコに殊し並し家族と山林園
 地づく或ハ疾地を打つと杯と争編となり神風禰の
 横濱の換撥を同人及ひ以上は人の日幸、改りて余
 抱女をハニウヨルクへ後るべしと示談し十月六日乗船せし

又船中にて又強勃及ぶ弟に依り元の旅宿へ戻り
 横濱住人八百庄唐物等の扱ひを倭文を考て出
 和談し同十六日次の船に乗十二月三日子方と其の
 船中ニ死し同七日ニウヨルクへ着し正月元日分真行
 せし又二日三日分寅吉發病して同十六日終ニ病死
 是より金主の外五人を換金の質として子役乃
 者を彼方の取らざる由を云掛或ハ荷物を考て
 と種々の事起りて家族の男女難儀に及ぶ由を
 或人第に編を見り難く日寅吉ハ元京師ニ桑新地

芥稻荷といふ傍に小家を住居の是又煙居して親と
大者と云共ふ古町誓願寺の境内を子妻煙業と
すし見物の人又一殊二殊と乞ふるもの下織の者あり
天保の末煙業師山本小鶴が乳杭後り竹沢後次郎
多福樂等を去似る右夫早竹寅吉と号し亦く控
煙業と真名を控む古き名をかりし人の寅吉が
右夫と稱し哥舞妓役者の如く自ら大なる悪
心をも多るる一形も下節の支那と記載する
り新算紙の名を下さん等を悪ふと

編者言曰然り我々の思ふ所ハ又違へり彼洋行
の始終を記して外ふ人の情態とも察知さべく
己東三思を加えて漫る外園後り過る患難
と醸成し甚愛又玉の内外園をも開原する小
及ぶ中にもお波とほほをる又寅吉元下織の者
とのども藝を以て教人の棟梁と成るも又ま
控る一己の豪傑なり功名の君子の欲せざる
天地の定理寅吉名刺の二つと欲して外ふの鬼と
するも是又一つの警戒なるべし

七ノ七

仁人

○五月十六日横濱と出帆して大坂に着せしと云
人の結あひ又日満月十又日夜亥の刻江戸表市中上野
丑うし又満り火の赤上りあかあがり由よし出火でしの兵火
と中風ちゆうふうせりせりと云

京都新聞

○小松帯刀丹羽淺次郎大村益次郎小原仁兵衛土肥
謙孫山田市右衛門の薩原懐吉新田三郎本村三郎
船越洋之助後田丸馬助土方大一郎徳島内小笠原控六
河友新平豊田控次郎小川克之助右等々右方丈

江戸府の職掌しやくさうは 作付追々さくづき以東下以下に成由
○富岡淺高とみおかの詠奇よきと云

拙せつ公こう法ほふ席せき法ほふ建けん管くわん之の付つ聊りやう志しをを備び
ききるる後のち又また法ほふ席せき備びくく事ことをを歌うた
ききここしし終つひのの君きみ又また仕つかへへてて天あま津つ日ひ此こゝ
老おううりりととああららぬぬととももししととももししととももしし
りりははしし夫おつとのの名なをを法ほふくくせせしし也やとと云い
ちちととせせらら後のちととああららぬぬととももししととももしし
閏四月廿八日出信及菅光寺丑うしのの虫むし快かい申まを云い

○甲府の方も又々賊徒寄り集り頼お望み付仕二十
 日松代より兵隊二小队大砲二門司令砲子其外
 附属三百人程出張五々由日八方より兵隊通
 仍何とせし強々發浮りくくと日と暮し今年松
 代侯が京都甲州裁後より諸所に出張の夥多
 こ付費用も又々不十分と云ふ事以信及路の松代侯と
 一ト力に致し只管下民に玉りひるす神の如く裁
 い振子ありし松代侯長隊通好と云れば古民共性
 來の平伏を合せ辨と云ふ事以信及路の松代侯と
 末の平伏を合せ辨と云ふ事以信及路の松代侯と

○甲府の方も又々賊徒寄り集り頼お望み付仕二十
 日松代より兵隊二小队大砲二門司令砲子其外
 附属三百人程出張五々由日八方より兵隊通
 仍何とせし強々發浮りくくと日と暮し今年松
 代侯が京都甲州裁後より諸所に出張の夥多
 こ付費用も又々不十分と云ふ事以信及路の松代侯と
 一ト力に致し只管下民に玉りひるす神の如く裁
 い振子ありし松代侯長隊通好と云れば古民共性
 來の平伏を合せ辨と云ふ事以信及路の松代侯と
 末の平伏を合せ辨と云ふ事以信及路の松代侯と

関東の風耳

○国四月十九日江戸常盤橋内賊船数隻に邸に
 左陣多倉敷に糸敷守清の内湯嶋侯の人數九一
 大隊斗り横濱に繰出しお成同所より急ぎ馳せて
 羽取庄内に發向なりと云ふ
 右行軍中、薩藩より士四人土藩二人加り人の監視
 人を見と云、院隊の内二小队斗り大銃獲清く經
 院と携へて余いふ強士院元匹院を携へ大銃三挺

陣大田春以進軍大田春藩主退の依倉藩に陣
陣屋の本家なる吉田家の家臣に以て之と程

下総田結静の始末

○四月廿三日下総水尻山田屯集の城徒江戸より
と千代田へ押来る等あり後前勢依土原勢出張の
以城徒押来る換子なり

同廿四日松戸歌より城徒入府せんとする由放末の
西藩の兵隊新着より方陣を移し一隊の城松戸に

取まり別隊判くと兵器と官軍に交え後前勢を

これを獲り獲る又一群の城松戸の間より千代

に掛りたるを依土原藩引退してこれを止す城を

も伏せしめ薩兵の兵とせし格護し其扱所乃

兵器の 大総督府、是出し翌廿五日應援の薩兵

に江戸、引去同廿六日けの城徒の田安の手引後

しお成東北の城徒結静と

同四月朔日木更津に屯集の城徒押来るけり

須本藩兵出張あり城に松戸歌に屯を依土原藩も

應援として松戸八幡に移る城徒亦謝罪の旨を述べ

雖も其苦の涙をあげると暮るも依る落着ふ處
 同二日再々結の談判と成八幡口の儀其勢具塚村の
 後堂督行儀にハ籠前勢強が谷に依去原勢と子分と
 定やく城の宿陣に格仕寄せお成し由
 同二日未だハ幡儀前子具塚後堂子亦城後ふこ押
 奇戦争と成強の谷に依去原と合戦を始む
 是ハ二方の戦ひ官軍先鋒若戦たりけ日依去原
 勢奮戦しけ船格宿押寄せ同所に放火し城を
 追拂たり薩兵二小队懸援としけ爰又おると云

同四月徳津兩家の兵格見門と出強
 同五日依倉に進軍し船格放走の城後木更津其里
 谷に陣する由あり
 同六日千原宿に進軍せりけ日先日よりの戦城勢強
 大いなるあり依る副総督出馬と成先鋒薩兵
 大村後の末舎と
 同七日城軍上総兵八幡口、押寄し又井川を要害とし
 て防戦を城又放走たり官軍婦ヶ崎と追討又井の
 陣屋を焚ふる

同八月官軍本更津吉里谷に押寄る賊亦早くこ
海陸より逃去^{まは}里一ト先慈静^{まろ}及ぶ^んと

同十日より官軍退^ひ江戸表に凱陣とせたる由

説ニ同上総下総丑^この佐幕の小藩多々^されハハ戦

不致^くせ^られ^ば賊徒^ある^べし^と具^この^う相^あ互^ひ

去^まる^べし^と上^う陸^り交^あり^て甲^か府^ふに^ま横^より^てせ^しその

やう^やう^うと^と終^つる^べし^と詳^し況^わと^と聞^き得^える^べし^と第^だ八^は編^{へん}に^に布

告^こぎ^ごと

知新館告文

此社中ニ於テハ珍^め貴^き並^びニ諸^{しよ}相^あ庭^{てい}物^{ぶつ}等^らヲ記^きスノ本^{ほん}意^いナリ
又館外ノ人タリ^に功^{こう}能^{のう}アル事^{こと}ヲ衆^{しゆ}人^{にん}ニ示^しサシカ或^{ある}ハ書^か
籍^{せき}等^らヲ彫^{てう}刻^{かく}セント欲^ほセラル^べキハ此社中へ御^ご示^し談^{だん}ア
ラハ速^{すみ}カニ廣^{ひろ}ク海^{うみ}内^にニ布^ふ告^こスベキ者^{もの}ナリ

浪華

知新館

大坂心齋橋本町此入 河内屋忠七
同 北久太郎町四丁 河内屋清七
京都四条河原町西入 山城屋勘助

弘通所

大坂心齋橋北久太郎町

河内屋喜兵衛

同 今筋安土町

河内屋和助

同 北久太郎町四丁

河内屋新次郎

京都三条御幸町角

吉野屋仁兵衛

同 御幸町姉小路上

菱屋孫兵衛

同 三条寺町西入

吉野屋甚助

同 富小路四条上

丁子屋榮助

同 寺町姉小路上

錢屋惣四郎

樂天堂 佐藤了齋
著